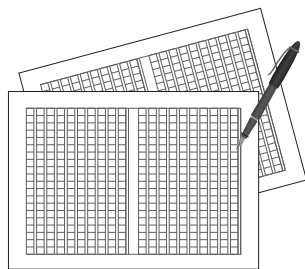


第7回 ふるさと秋田文学賞 受賞作品集



第7回ふるさと秋田文学賞 受賞作品集



刊行にあたって

本県は、全国の都道府県に先駆けて、平成22年に「秋田県民の読書活動の推進に関する条例」を制定し、平成26年には、11月1日を「県民読書の日」と定めました。

「ふるさと秋田文学賞」は、その記念事業として創設され、県内外の方々に秋田への愛着を深めていただくとともに、広く読書に親しむ気運を高めることをねらいとして、秋田の自然や文化、風土、人物などを題材として描いた作品を対象に、選考されている賞であります。

第7回を迎えた今年度は、過去最多であった昨年度と同数の132編もの御応募をいただき、心から感謝申し上げます。今年度の特徴として、コロナ禍に思うことを題材とした作品が見受けられましたが、この機会に改めて秋田という故郷や、そこに住まう家族・友人に思いを馳せた方が多かったのでないでしょうか。

読書は、知性や想像力が磨かれるといった効果はもちろん、生き方を見つめ直すきっかけとなり、不安やストレスをやわらげることや心の免疫力の強化につながるとも言われております。

今後も、県民の皆様が、どのような日常においても本に触れ、心豊かな人生を送ることができまよう、読書活動の推進に力を注いでまいりますので、よろしくお願いたします。

令和3年2月12日

秋田県企画振興部長 出口 廣 晴

目次

第7回ふるさと秋田文学賞 小説の部

◇ふるさと秋田文学賞

赦し

受賞者のことば

常田 あさこ・・・7

◇ふるさと秋田文学賞佳作

近かったり遠かったりするもの

受賞者のことば

青山 トーゴ・・・53

第7回ふるさと秋田文学賞 随筆・紀行文の部

◇ふるさと秋田文学賞

蚕のなぐさめ

受賞者のことば

春野昌和・・・91

◇ふるさと秋田文学賞佳作

消えゆく集落の記

受賞者のことば

鹿住敏子・・・111

◆選評

「削ること」を考える

内館牧子・

無駄を省く努力

塩野米松・

第7回ふるさと秋田文学賞について

西木正明・

◆一次選考委員寄稿

単色化

柴山芳隆・

◆秋田県の読書活動推進施策

・

◆作品募集要項・応募者内訳

・

第7回ふるさと秋田文学賞 小説の部

ふるさと秋田文学賞

赦し

常田 あさこ・作

赦
し

横手営業所の生き字引こと経理課長から「美咲ちゃんに紹介したい人がいる」と言われたのは、五月の連休明けのことだった。

「農家の長男で一人っ子だけど、両親すでに亡くなってるから嫁姑問題は心配ないからさ」

「でも私、年齢的に跡取り産めそうにないですし……」

「そういうのは気にしなくて大丈夫。本人もアラフィフで、結婚はあきらめてるって話だし、軽い気持ちでどうかな？ 会うとき私も一緒に行くし」

私も相手もその気がないのだから会うだけ無駄だと言って断りたかったけれど、この手の厚意は受け取っておくのが正解だと過去の経験から学んでいた。その人が本当に結婚をあきらめているのか、それとも強がりなのか判断できないものの、課長の紹介なら面倒なことにはならないと信じて会ってみることにした。

「ご期待に添えるかわかりませんが、ありがとうございます」

「じゃあ決まり。行きたいところとか食べたいものとかある？」

「稲庭うどんの工場見学がしたいです」

数年前に雑誌で見て以来、行ってみたいと思っていた。予期せぬ形で夢が叶うことになった。

当日は課長が車で迎えに来てくれた。移動中に、お相手は課長の同級生の甥っ子であること、四十代後半で婚姻歴はないこと、羽後町でお米を作っていることを聞いた。先方とは現地で合流する。

「実は私も初めて会うんだ。無理だと思つたら遠慮せず言つてね。責任もって断るから」
その年齢まで一度も結婚せず独身でいるくらいの人だから、おそらく断つてもらふことになると思った。自分だつて一度も結婚せず独身のまま四十代に突入してしまつたくせに。

「ああ、もう来てるわ」

白いセダンをチラリと見て課長が言う。空きスペースに駐車して降りると、二人の男性が近付いてきた。

「はあー、めんこいお嬢さんだこと」

「セクハラやめれ」

年配の男性が無遠慮に私を見てきて、課長がそれを諫める。その後ろで戸惑つたような表情を浮かべた男性と目が合つて、すぐ逸らされた。

ちゃんとした自己紹介もないまま、付かず離れずの距離を保つて建物に向かった。洋服の上からでも引き締まっていることがわかる後ろ姿は、聞いていた年齢よりずいぶん若く見える。

白髪混じりの髪を見て、なぜか安堵した。

今日の服装選びは難航した。お相手に失礼のないことが大前提。課長の顔を潰さないためにも好印象を与えたい。とはいえ行き先はうどん工場だから……派手すぎず地味すぎず……などと考えた結果、授業参観の母親みたいになった。

彼はチェックのシャツにジーンズという気取らない格好だけれど、姿勢とスタイルがいいからオシャレに見える。猫背でだらしない体型の私とは違って、服装でカバーする必要はないのだな。

数年来の夢だった工場見学は、年甲斐もなくはしゃぐ男女二名に圧倒されているうちに不完全燃焼で終わった。しっかり者の課長は、職場を離れたら明るく愉快な人なのだと初めて知った。

見学後、食事処で昼食をとった。そこは鹿威しの鳴るお座敷ではなく、「ご趣味は？」といったお決まりの会話もなく、「あとは若い二人で……」といった展開もない、ひたすら楽しい食事会だった。もとい、主に楽しんでいたのは年長の二人で、主役であるはずの私たちは愛想笑いでやり過ごしたのだが。

彼は悪い人には見えなかったし、奥ゆかしい態度に好感を抱いた。だから、帰りの車内で課

長に彼の印象を聞かれたとき「いい人そうですね」と答えた。かといって自分から積極的に「また会いたい」などと言うほどでもなく、相手からも求められなかったので、何の進展もな
いまま数か月が過ぎた。

「美咲ちゃんはお盆に帰省するの？」

課長にそう聞かれたのは八月頭のこと。

「こつちで過ごします。西馬音内にしまないの盆踊りに行ってみたいので」

「そんなら誠に案内してもらったらいいわ」

「マコト？」

「ほら、稲庭うどんの……」

言うなり課長は電話を取り出して、秋田弁で話し始めた。相手が例の同級生だということも、待ち合わせの時間や場所が勝手に決められているということも、すぐにわかった。

彼となら二人で会ってもいいと思っただし、案内してもらえらなら心強いから、甘えることにした。彼の連絡先は知らされず、課長に指示された待ち合わせ場所で彼を待った。

「お久しぶりです」

奥ゆかしい彼のイメージにピッタリな紺色のコンパクトカーから降りて、誠さんは挨拶してくれた。

「遠くまですみません」

「これくらい『遠く』に入らないですよ」

独特のイントネーションが彼の言葉をやわらかくする。初対面るときより精悍な印象を受けるのは、以前に比べてずいぶん日に焼けたからだろうか。半袖のシャツから見える腕が眩しい。

誠さんは穏やかな運転をする。密室に二人きりになるのだから、さすがに初めは緊張したものの、誠さんを取り巻く空気がゆったりしていることもあって、手を伸ばせば届く距離に彼がいることには数分で慣れた。

「それにしても、西馬音内のこと何で知ったんですか？」

「子どもの頃から二時間サスペンスが大好きで……」

「ああ、時刻表トリックとか、旅情ミステリーってやつですよね」

「一番好きなシリーズで知ったんです。『西馬音内』っていう言葉の響きが強く印象に残って……」

会話のペースが忙しくもなく、かといって遅すぎもせず、まさに絶妙。息が合うというのは、こういうことか。

横顔を盗み見れば、意外と言っては失礼だが、思いのほか端正な顔立ちをしていた。スツとした鼻、品のある唇、涼やかな瞳、少し寄せられた眉……不躰な表現をするなら、顔がいい。軽薄な表現をするなら、イケメン。

同じ中学や高校にいたら校内イケメンランキングの上位に入ってくるだろうし、同じ会社にいたら社内でもちょっとした話題になるだろうし、コンビニの店員さんだったら毎日寄りたくなるだろう程度には、かっこいい。さすが美人が多いと言われる秋田県。

初対面からこれまでの印象も良く、充分に魅力的なこの人が結婚せずに独身でいるのは意外だった。何か理由があるはずだと考えた結果、いくつかの可能性に至った。

まずは、農家の長男だということ。実態はどうあれネガティブなイメージがあるから、少なくとも私は腰が引けてしまう。それから、地方の町で農業に従事していること。地域に独身女性が少ないれば出会える確率は低くなるし、農業従事者は男性が多いから、仕事を介して出会う機会も少なそうだ。

とはいえ、最大の理由は本人にその気がないことだろう。だって彼と結婚したい女性なんて

たくさんいるはず……と判断するのは、いささか性急だろうか。私が知らないだけで、実は人格が破綻しているとか、女性やお金にだらしないとか、結婚には向かない理由があるのかもしれない。

さもなければ、過去の失恋を引きずっているとか、恋愛に対して興味が薄いとか、恋愛対象が女性でないとか、結婚に至らなかった理由があるのかもしれない。

そもそもこの多様性の時代に勝手に彼を「男性」と定義するのもいささか乱暴かもしれないなどということにまで考えを巡らせて、気を紛らわせた。この状況を都合よく解釈して期待してしまいそうな自分に気付いたからだ。

誠さんが案内を引き受けてくれたのは、おじ様に言われたからで、それ以上でも以下でもないことはわかっている。勝手に期待して、当たり前前に裏切られて、目も当てられないほど傷付くのは嫌だ。

年齢を重ねると傷が治りにくい。若い頃は物理的な傷も精神的な傷も比較的すぐ癒えた。一世一代の恋に破れて瀕死の重傷を負ったときも、時間薬だけで生き延びた。今ならきつと致命傷だ。

三十代になって若さという優位性が失われると、恋愛に対して尻込みするようになった。誰

かに好意を抱いても、足がすくんで動けなかった。私なんか好かれても迷惑だろうと思ったし、フラれて傷付きたくもなかった。

三十代を折り返すと、誰かに対して「素敵だな」と思うことすらなくなった。恋愛や結婚をしないと決めたわけではないが、恋愛や結婚をするための努力はしなかった。

高望みするなとか、出産を考えて若いうちにとか、結婚相談所に登録しろなどと言ってくる人たちもいたけれど、そういう人たちに限って口を開けば家庭の愚痴で、それは愚痴と見せかけた惚気だったのかもしれないし、自分の家庭をこき下ろすことが既婚者界隈の暗黙のマナーか、周囲から妬まれないための戦略なのかもしれないけれど、自分が不幸だから他人も同じように不幸な目に遭わせたいのかと邪推してしまう。

彼らは私が三十二、三になると急に何も言わなくなって、私より若い世代に同じようなことを言い始めた。せっかくのアドバイスを無にする人間だと諦めたのか、結婚できないかわいそうな人間だと気を遣ってくれたのかはわからない。

いろいろなことを思い出して悲しいような悔しいような気持ちになったけれど、誠さんの整った横顔が目に入ったら、どうでもよくなった。美しいものを見ると心が安らぐ。

元来、私は極度のメンクイで、若い頃は一目惚ればかりしていた。どういいうわけか付き合っ

た相手は軒並みクズ男だったけれど、顔がよければ大抵のことは許せたし、別れてからも「でも顔はよかった」と思えば諦めもついた。

恋はずいぶん休んでいるけれど、キレイな人はやっぱり好きだ。若くてキレイな人もいいけれど、若いうちは親からもらった美しさ。年齢を重ねてもキレイな人は、内面の美しさがにじみ出ているか、美しくいるための努力をしているか、その両方だから、なおよい。年齢を重ねてもキレイな人は尊敬できる。

誠さんと私は当たり障りのないことを話したり、なんとなく黙ったり、ラジオから流れてきた懐かしい曲に合わせて歌ったりした。二人で過ごすのは初めてなのに、ずっと昔から一緒にいたような、古い友人に数十年ぶりに再会したような気持ちになった。

数十分のドライブの後に到着した誠さんの家は、いわゆる田舎の農家のイメージそのもの。敷居をまたぐと、外観からは意外なほど明るく清潔で、こざっぱりとしていた。

「ああ、ズック履いてきてくれてよかった」

玄関で靴を脱ごうとしたら上から声が降ってきた。

「足手まといにならないようにと思いました」

人混みでも歩きやすいようにスニーカーで来た。虫に刺されないように足首まで隠れるパンツを履いて、靴擦れしないように靴下を履いて。機能性が最優先とはいえ女性らしさも出したかったのも、とろみのある素材のブラウスを合わせた。

本当は浴衣を着たかったけれど、親しくもない男性の前で浴衣姿というのは警戒心がなさすぎると思って自粛した。自意識過剰だ、要らぬ心配だとわかっているが、ひよんなことからそんな雰囲気になったら、断る勇氣もないから流されて、絶対に後悔する。そんな事態を避けるための安全策だ。

何でも先回りして考えてしまうのは私の悪い癖。考えたとおりにことが運ぶとは限らないのに。たいてい想定外のことが起こって、激しく動揺して対応できないのに。いつからこんなにめんどくさい性格になってしまったのだろう。小さく息を吐いた。

「ここから会場まで、歩いたら三十分くらいなんです」

脱いだ靴を揃えて立ち上がったと思ったら思いのほか近い距離に彼がいた。色素の薄い瞳の底を探して、ジッと見つめる。

「車で走ってもどうせ駐車場から歩くし、渋滞するんで、あの……」

彼の目がハイスピードで泳いで、私の無遠慮な視線から逃れた。

「ちょっと大変ですけど、みさ……さん、歩けそうですか？」

モジモジしている理由が私の名前を呼ぼうとして照れたからだと察するくらい洞察力はある。未遂とはいえ、名前を呼ばれたのは初めてだ。私はまだ彼の名前を一度も呼んでいない。

「大丈夫です。ただ、誠さんと私とじゃ足の長さ違うんで、ご配慮お願いします」

「んでは、ゆっくり行きましょう」

勇気を出して呼んだのに誠さんは無反応で、肩透かしをくらう。

車を降りたあたりからずっと緊張感を抱いている。初めての場所、男性の家、二人きりという三拍子揃って緊張しないわけがない。

対する誠さんはずいぶんリラックスしているように見えて、不公平だと思う。自宅というまさに自分のホームグラウンドだからか、実は女性を家に入れることに慣れているのか、単に私を女性として意識していないだけなのか、理由はわからない。

じゃあ逆に私は誠さんを男性として意識しているのかと問われれば、戸惑いながらも答えは「はい」だ。彼がイケメンだと気付いたときから、私は誠さんを男性として意識している。

素敵だと思える独身男性に出会うのは数年ぶりで、そのうえ彼は感じがよくて親切で、あろうことか一人暮らしの自宅に招き入れてくれたとなれば、浮き足立って当然。浮かれて足元を

すくわれたとしても、やむを得ない。

私の海は長いこと凧だったから、ずいぶん出番のなかったサーフボードはボロボロだし、ウエットスーツはサイズアウト。それでもこのビッグウェーブに乗りたい。きつとラストチャンスだから。

したくないサーフィンに例えてしまうほど混乱していることを隠せるだけの演技力はあるし、湧きあがる感情を暴走させないだけの自制心もある。大丈夫。一方的に抱いた勝手な好意を誠さんに悟られるようなヘマはしない。

お仏壇の前に座って深呼吸したら、私の海は再び凧いだ。よりによってお盆の時期にお邪魔しているのだから、ご先祖様にはご挨拶しておかなければ。

バッグに潜ませてきた羊羹をお供物の山に紛れ込ませる。詰め合わせを供えるほどの関係性でもないから、大きめの一本にした。日持ちするし常温で置けるし、誰かにあげることもできる。お供物を決めるにも考えすぎてしまうのは私の悪い癖。小さく息を吐いた。

「お盆に凶々しくお邪魔して申し訳ありません。誠さんとは特別な関係ではないので誤解なさらなくてください。西馬音内の盆踊りを案内していただくため、後ほど二人で出かけます」

ゆっくり目を開けるとキュウリの馬とナスの牛が飾られていた。誠さんが準備している様子

を想像して、あたたかい気持ちになる。年上の男性をかわいいと思うのは失礼だろうか。昔ながらの行事を大切にする彼は、愛情たっぷり育てられて、すくすく素直に成長したのだろうな。

視線を感じて見上げると、ご先祖様たちがズラッと並んで私を見下ろしていた。古いと思しき方から写真を一枚一枚拝見していくうちに、なぜか涙がこぼれてきた。

このとき唐突に、赦されたのだと思った。ずっと胸につかえていたものがとれたような、肩の荷が下りたような気がした。囚われて生きてきたことを思い知らされ、そろそろ解放されてもいいのかもしれないと思わされた。

誠さんのご先祖様なのか、それとも別の存在なのか。上の方から視線を感じた。怖いのに懐かしくて、背中がゾクゾクするのに胸のあたりが熱くて、泣きたいわけじゃないのに涙が止まらない。

「お茶いれたんでこっちで……つて、どうしたんですか？」

呼びに来てくれた誠さんが驚いた顔をする。

「お線香の煙が目染みて……」

下手な言い訳をしてバッグからハンカチを出した。自分が自分でないような気がして心細く

て、誠さんに抱きしめてほしかった。

誠さんが出してくれた温かいお茶を飲んで、ふうき豆を食べたら人心地ついた。誰かに見られていたような感覚も消えた。

「そういうえば、迎えにまで来ていただいたのに手ぶらで……」

お供物に気を取られて誠さんへの手土産にまで気が回らなかった。迎えに来てもらえて助かったし、移動中とても楽しかった。それを伝えたかったけれど、どう言ったらいいのかわからなかった。

「かえって、手ぶらで来てくれてよかったです。俺、何のお構いもできないんで」

誠さんは屈託なく笑った。

「せめて夕ごはんは私にご馳走させてください」

消え入りそうな声で言ったら、申し訳なさそうな顔をする。

「観光客で混むんで、うちで食ってから行きましょう」

「そこまで甘えるわけには……」

「たいしたもんじゃないけど、用意してますから」

立つ瀬がないとはこのこと。恋のビッグウェーブなどとふざけたことを考えていた数分前の

自分を殴りたい。厚かましくて気が利かなくて小指の爪ほどの女子力もない私が、奥ゆかしくて気が利いて女子力あふれる誠さんとどうこうなるわけがない。

進展する可能性ゼロとわかればいっそ清々しくて、こうなったら肩の力を抜いて楽しんでやえ、と開き直った。素敵な男性と一緒に過ごせるなんて幸せすぎる。これ以上、何を望むというのか。

「ここでテレビでも見て、ゆっくりしててください」

「何かお手伝いできることがありますか？」

他人を台所に入れたくないかもしれないと思いつつ、かといって「じゃああんまりさせてもらいます」ってわけにもいかないから、念のため聞いてみる。

「いや、大丈夫です」

一人暮らしなりの経験はあるものの、あくまで自分だけが食べるテキトウ料理。決して料理上手ではないから、断られて安心した。どのみち進展は見込めないけれど、これ以上の失点は避けたい。

「それより体力温存しといてください。途中で『疲れたからおんぶして』なんて言わないように」

そういつて立ち上がった誠さんの表情は逆光でわからない。

「美咲さん細っこいから、いざとなれば背負いますけどね」

熱くなった顔を見られないように、あわてて下を向いた。

水の音や何かを炒めるような音が聞こえる。子どもの頃はいつもこうして夕食ができるのを待っていた。チャンネルを教育テレビに合わせたら、好きだった忍者のアニメをやっていた。親に合わせる顔がなくて、実家にはもうずいぶん帰っていない。

昔と違う雰囲気のエンディングテーマを聞いていると、誠さんが大きなお盆を持って現れた。ホカホカごとんとアツアツお味噌汁。キュウリとトマトを切ったもの。ナスと豚肉の炒め物は多分お醤油味。おいしそうな香りが鼻に届いたら、急にお腹がすいてきた。

「こんなもんじゃないですけど」

「旬のお野菜たっぷりで、これ以上の贅沢ないですよ」

レトロなお皿に素朴に盛られた様子がノスタルジーを刺激する。

「冷めないうちにどうぞ」

「いただきます」

まず、お味噌汁に口をつけた。

「おいしいです」

「本当ですか？　まずかったら無理しなくていいんで」

「いえ、お世辞抜きに、とってもおいしいです」

ネギとお豆腐のお味噌汁が五臓六腑に染みわたる。自分では洋風スープしか作らないから、家庭のお味噌汁はずいぶん久しぶりだ。

「ほはんも、ほひひい」

無造作にごはんを口に入れたら火傷しそうなくらい熱くて、ハフハフしながら咀嚼する。い
い年齢をして子どもみたいな食べ方をしてしまったことに気付いたけれど、もう遅い。

「俺が作ったあきたこまちです」

「お米の味がしっかりしてますね」

お米だけでおいしいから、おかずがいらないくらいだ。

「研ぎ方にもコツがあるんですよ」

誠さんは、一回目の水はすぐに捨てること、手早く作業することなど、おいしく炊くための
コツをわかりやすく解説してくれた。

「秋に新米できるんで、食べに来てください」

どうせ社交辞令だとわかっているけれど、またこうして誠さんと食卓を囲めるなら……

「うれしいです」

「あ、そうだ。キュウリとトマトとナス持っていきませんか？」

「いいんですか？」

「一人分でいいのに植えすぎてしまつて……」

「ありがとうございます。遠慮なくいただきます」

キュウリもトマトもみずみずしくて、ギョツと濃い味をしている。ナスは調理法によるのか品種のせいか、トロツとしておいしい。

「米も少し持つていきますか？」

「さすがに厚かましくありませんか？」

「どうせ食いきれないんで」

「え、じゃあ、お言葉に甘えて……」

「俺も助かります。よかつたら定期的に手伝つてくださいよ」

そこにそれ以上の意味はなくても、誠さんに会えるのなら……

「喜んで」

次はお礼を用意しなくては。誠さんは何が好きなのか、何をあげたら喜んでもらえるのか、それまでに知っておきたい。

「そういうえば美咲さんは横手に来たばかりなんですよね？」

「この四月からです。それまでは仙台の本社に勤めていて」

「仙台……」

「秋田の人って仙台に遊びに行きますよね？ 週末に秋田ナンバーよく見かけました」

「そうですね。俺は行きませんけど」

誠さんはお箸を置いて視線を彷徨わせている。何か言いたそうに、それでいて言いにくそうに。私もお箸を置いて姿勢を正した。私をまっすぐ見た誠さんの色素の薄い瞳の奥には、覚悟と不安と迷いの色が同居している。

「実は俺、若い頃に仙台にいたことあるんです」

「じゃあ、どこかですれ違ってたかもしれないですね」

能天気 answered 私に、誠さんは自分の過去を話し始めた。高校を出て仙台の専門学校に入ったこと。就職氷河期で正社員になれず、契約社員になったこと。働いて、働いて、働いて、あ

る日プツリと糸が切れてしまったこと。

「朝、身体が動かなくて、このまま死ぬかもって怖くなって、仕事辞めて、アパート引き払って、この家に戻ってきました」

「そうだったんですか……」

私たちの世代は誠さんたちに比べたら随分マシで、大企業は無理でも、中小企業で正社員になるのは難しくなかった。大学卒業後、私は仙台に本社を構える企業に就職した。

本社勤務で転勤はないと聞いていたのに、横手営業所への異動を命じられた。左遷だと思った。会社にとって要らない人間なのだと思った。いっそ退社しようかとも考えたけれど、転職先が見つかる保証もないから、社命に従った。自分は負け組だと思った。

失意のまま秋田に来て、自分は負けていないのだと知った。そもそも人生に勝ち負けなんて概念はそぐわない。空も太陽も土も水も山の木々も、暮らしている人々も、仙台より色濃く鮮やかに感じる。私は今、これまでの人生で最もビビッドな世界に生きている。

「親父は俺を専門学校に行かせるために教育ローン組んで、それを返すために働いてたのに、俺は手伝いもしないで……」

話を聞きながら、ごはんが乾いていくのを見ていた。ほんの数分前まではあんなにもツヤツ

ヤ輝いていたのに。

「親父は俺には何も言わなかったけど、酒の量がどんどん増えて、夏のよく晴れた日に庭で倒れて、死にました」

親を亡くした経験のない私は何も言えなかった。こういうとき、気の利いたことが言えたらよかったのに。

「親父が死んで、俺がすっかりしなきゃって思いました。バイトを始めようと思ったけど、面接の日にかから出られなくなつて、人と会うのも怖くなつて……」

当時の誠さんは心のバランスを崩していたのかもしれない。早い段階で受診していれば違う展開があつたかもしれない。とはいえ、当時は受診のハードルは高く、心を病むのは弱い人だという誤解もあつた。人間関係が濃密な地方では、心の病だと知られたら、噂になったり偏見を持たれたりしただろう。

「一昨年、お袋が死にました。いつも早起きなのに、その日はなかなか起きてこなくて、おかしいと思つて様子を見に行つたら布団で冷たくなつてました」

誠さんのお母様だから、年齢を考えれば特別早くはないけれど、平均よりは若くして亡くなつたのだろう。

「警察に連絡して、ひとりで母親の死に顔を見ていたら、いったい俺は何やってんだらうって
情けなくなってきた……」

「情けなく？」

「だって、親父もお袋も、俺が殺したようなもんじゃないですか」

「そんなことは……」

ないとは言い切れなかった。

「それで、せめてもの罪滅ぼしに、先祖代々の田んぼを俺が守っていかうって決めたんです」

父親の死後、田んぼを管理してくれていたおじさんから米作りを教わった。農家の血がそう
させるのか、おもしろいほどうまくいったし、自分の性に合っていた。体を動かしていれば気が
紛れたし、田んぼにいれば気持ちが悪く落ち着いた。

米作りと並行して、母親がかつてしていたように、畑で野菜を作りはじめた。わからないこ
とはおばさんが教えてくれた。形は悪くても味は問題なく、自分で食べる分には十分だった。
新しいことに取り組むのは楽しかったし、土に触れていると心が安らいだ。

「俺がもつとしっかりしたら、親父もお袋もまだ生きていたかもしれないって思うと申し訳
なくて。でも、死んだ人は生き返らないから、俺がその人たちの分も生きねばならないと思う

んです」

「そうですね……」

死んでいった人の分も生きなければならぬ。一生消えない罪を背負って。

誠さんの家を出て、すっかり暗くなった道を歩く。カエルの鳴き声が大きくて、誠さんはあまり話さない。祭の会場に到着すると、子どもたちが踊っていた。

「子どもの部と大人の部に分かれてるんです。もうすぐ大人の部に切り替わるかな」

「誠さんも子どもの頃は参加してたんですか？」

「いや、俺はこういうの苦手で」

「なんとなく、わかります」

「そうですか？」

困ったような笑顔がたまらなく魅力的で、あわてて顔を背けた。

「観覧席みたいなのもあるんですね」

「あ、座って見たかったですか？ 気が利かなくてすんません」

「いえ、初めてですし、あんなに近いところに行ったら、どうしていいかわからないです」

「来年は仕切台から見ましようか。なんなら踊ってもいいし」
誠さんは来年も私と来るつもりなのだろうか。聞いてみたい気もしたけれど、やめておいた。

「見るだけじゃなくて踊ることもできるんですか？」

「時間帯によつては誰でも参加できたはずです。教えてくれる人もいたと思つたな……」

「誠さんも一緒に踊つてくれますか？」

「いや、俺はやめときます」

「じゃあ私も遠慮します。さすがに知らない人たちに混ざつて踊る勇氣はないですよ。地元の人でもないのに」

「美咲さんは地元の人になるでしょう？」

「えっ？」

それつてもしかして誠さんのところに嫁ぐつてこと？ 今のつて遠まわしなプロポーズ？

「横手は隣町だし、地元みたいなもんじゃないですか」

そういう意味かと脱力した後で観念する。いよいよ本格的に彼を好きになつてしまったことを認めざるを得ない。身のほど知らずな恋だとわかっているから、叶わない恋だと知っている

から、せめて今夜だけは夢を見させて。

日本三大盆踊りである西馬音内盆踊りといえ、彦三頭巾と藍染浴衣でしっとり密やかに踊る印象だったのだが、実際に来てみれば少し違う。これまで見聞きした文章や画像からではわからなかったのだが、お囃子がにぎやかで、これぞ日本の夏といった風情。

もの悲しくも艶やかで、格調高い一方では親しみやすくもある。矛盾に満ちた西馬音内盆踊りには衣装も踊りも二種類ずつあって、それらが渾然一体となつて会場を包むから、彼岸と此岸の境界線が曖昧になる。非日常の世界で、殺した子の年齢を数えた。あの子が生きていれば今頃は……。

「予定日は二月八日ですね」

古ぼけた産婦人科で見せられたエコー写真の黒い粒。素人目には見落としてしまうほど小さな命。リスクを回避する方法は知っていたし、正しく行っているはずだった。しかし、欲にまみれた人間が熱に浮かされた状態で行う行為ほど信用できないものはない。未成年二人には、一人の人間の命は重すぎた。

彼に背負わせたくなかった。彼の重荷になりたくなかった。彼の未来を守りたかった。彼に

嫌われたくなかった。彼に捨てられたくなかった。彼に「諦めてくれ」と言われるのが怖かった。その一方で「産んでくれ」と言われるのも怖かった。彼と添い遂げる覚悟も、子を産み育てていく覚悟もなかった。

結局のところ私は自分がかわいくて、自分の都合で子を殺した。若さゆえの過ちなどという軽薄な言葉では済まされない過去。一生消えない罪を背負って生きていくと決めた。

その日はとても暑い日で、病院を出たところで倒れそうになった私を共犯者が支えてくれた。彼はどこか他人事で、こういうときに心身ともに傷付くのは女なのだと実感した。

半年ほど経って彼とは別れた。鼻をかんだティッシュのように、私は捨てられた。本当はもっと早く捨てたかったのだと思う。あの一件から私は精神的に不安定になっていたから、穏便に別れられるタイミングを見極めたのだろう。

卑怯な人だった。言葉に出さず、態度に出した。彼にとって私はもう用済みで、ただのゴミなのだと思います。耐えきれなくなつて私から別れを告げた。彼のお望みどおりに。彼のせいで私は深く傷付いた。私は被害者。そう思った。

十年ほど経って、彼は私も知っている後輩と結婚して、子どもに恵まれた。その事実をSNで偶然知ったときの衝撃は、言葉では言い表せない。驚き、怒り、悲しみ、戸惑い、絶望

……混沌とした感情の渦に飲み込まれた。

一人だけ幸せになるなんて許せない。私はこんなに不幸なのに。自分の子を殺しておきながら何事もなかったような顔で父親になるなんて許せない。私は母親になることを諦めているのに。

もう随分と昔のことだ。かつて殺人罪の時効が十五年で成立したことを思えば、自由になってもいいのかもしれない。全てを忘れて、何もなかったことにして生きられれば、どれほどよかったか。

年月を経るにつれて、「子がいたら……」と考えることが増えた。あのまま自然に任せても、無事に生まれてきたかわからない。彼を大嫌いになって、彼の血を引く我が子を愛せなくなって、虐待してしまった可能性だってゼロじゃない。

どのみち幸せと不幸の割合は一緒で、何かを得れば何かを失う。頭では理解しているつもりでも、選ばなかった方の道はいつまでも魅力的に思えるし、いなくなつた人はいつまでも恋しい。もしかしたら……という気持ちはことあるごとに浮かんで、私の首を真綿で絞める。ああ、いつそ死ねたらよかったのに。

気付けば両頬が涙で濡れていた。自分を責めて生きるのは苦しくて、悲しくて、やりきれない。それでも生きてきたのは死ぬ勇気がなかったから。死ぬのはこわいから生きる。ただそれだけ。

そんな意識が変化したのは東日本大震災だ。生きたくても生きられなかった人たちの分も生きねばと思った。私が自分の人生を全うすることが、私が幸せになることが、犠牲にした子に対する贖罪になるとも思った。

とはいえ、具体的にアクションを起こすこともせず、ただ日々を過ごしてしまった。私は相変わらず過去に生きていた。不幸な自分に、かわいそうな自分に酔っていたのかもしれない。

幸せになりたいと願ってしまえば、叶わないときにつらいから、無意識のうちに願わないようにしていたのかもしれない。それでもやっぱりどこかでは人並みに幸せになりたいと思っていた。認める勇気がなかっただけで。

過去に囚われているうちは幸せにはなれない。忘れる必要はないし、なかったことにはできないし、決して消えることもないけれど、過去は過去として今を生きなければ。彼岸と此岸の境界線が曖昧になった世界で、私は今を生きる決意をした。

隣を見れば、誠さんが心配そうに私を見下ろしていた。暗がりで開いた瞳孔の奥に悲しみの

海が広がっている。深くて広いその海に飛び込んで、疲れ果てるまで泳いでみたいと思った。

「亡くなった人のことを思い出していました」

「俺もです」

誠さんの全身が輝いて、白い湯気のようなものが立ち上っている。天に昇っていくのは、誠さんのご両親が遺した思いだろうか。それとも誠さん自身の後悔だろうか。

「今日、来られてよかったです。ありがとうございます」

「俺こそ、来られてよかったです」

誠さんの瞳に熱がこもる。脈絡も根拠もなく、好きだと言われているような気がした。事情は違えど、脛に傷を持つ似たもの同士、寄り添って生きるのもいいかもしれない。

「さっき、親父とお袋が近くにいるような気がしたんです。普段はそういうの信じないんですけど」

「今夜は何が起きても不思議じゃない雰囲気ですよね」

「お盆に帰ってきた人たちは、盆踊りにも参加するんですかね？」

「誠さんがどこの馬の骨ともわからない女と出かけたから、心配になって追いかけてきたんじゃないですか？」

「この年齢で親同伴は、きついなあ」

「お仏壇で『そういう仲じゃないので誤解しないでください』ってお伝えしておいたんですけどね」

「そんなこと言ってたんですか？」

「もちろんですよ。ご先祖様たちをザワつかせるわけにはいかないじゃないですか」

「あはは！ 何を熱心に拝んでるんだろうと思ってましたよ」

「誠さんは歯を見せて笑った。心の底からの笑顔だと思った。

「そろそろ戻りましょうか」

名残惜しそうな彼の提案に同意して、来るときより少しだけ近い距離で並んで歩いた。彼のシャツの袖が私のブラウスの袖に触れるたびに全身が熱くなって胸が苦しくなるのは、この時間になっても高い気温と湿度のせいだ。

「あの……言いくいんですが、実はすごく眠いです」

沈黙を破ったのは私だった。歩きながら眠ってしまいそうなほど眠かったし、隣を歩いてるのは生きた人間だと確かめたい気持ちもあった。

「よかったら、泊まっていけますか？」

ともすれば大胆発言だが、他意がないことは知っている。

「ありがとうございます」

「俺こそ、ありがとうございます」

その意味を考えていると、誠さんは焦ったように続けた。

「実は俺もけっこう眠いんで、助かります」

洗面所で顔を洗って戻ると、何の家具も置かれていないお座敷にフカフカの布団が敷かれていた。部屋がたくさんあるから家の中で迷子になりそうだ。

「嫌でなければ使ってください」

誠さんは青いジャージとグレーのTシャツを渡してくれた。

「じゃあ、おやすみなさい」

「おやすみなさい」

足音が遠ざかるのを待って、背徳感を抱きながらTシャツに顔をうずめた。遠慮がちに息を吸い込んだらフローラルな香りがした。思い返せば誠さんは無臭だ。いつかにどこかで見聞きした「遺伝子レベルで相性のいい相手は無臭」という説を私は信じている。

急に自分のおいが気になって、汗拭きシートを使ってから着替えて横になった。ひんやりしたシーツはサラサラで気持ちいいし、枕にはフワフワのタオルが巻かれている。

一人でもこうしてきちんとした生活ができるから、日本人男性にありがちな「家事をしてもらうために結婚する」必要はないんだな、と思ったところで意識を失った。

障子越しに差し込む光で目が覚めた。自分がどこにいるのか一瞬わからなくて、昨夜の出来事を思い出して、ちょっと笑った。この状況でもバツチリ熟睡できた凶太さは、立派なおバサンの証。これじゃあ誠さんじゃなくても、夜這いされる危険はなさそうだ。

障子と窓を開けて外の空気を入れる。太陽はすでに高く、焦って時間を確認すると七時過ぎだった。布団を軽く整えて、顔を洗いに行く。家の中がひっそりとしているから、自然と抜き足差し足忍び足になる。

「うわあ……きつつ……」

鏡に向かって思わず漏らした。むくんだ顔は不機嫌そうに見える。口角を上げて微笑んでみたり両手で頬を持ち上げてみたりした結果、取り繕うのはあきらめた。

自分の服に着替えて誠さんを探すと、台所で新聞を読んでいた。

「おはようございます」

「ああ、おはようございます」

ただの白いTシャツでも、誠さんが着るとオシャレに見える。

「麦茶、飲みますか？」

返事を聞く前に立ち上がって、コップに麦茶を注いでくれた。

「よく眠れましたか？」

「はい。とつても」

かすれた喉に冷たい麦茶を流し込むと、スーッと染み込んでいく。

「米が炊けたら朝飯にしましょうか。食べられそうですか？」

「何から何まで、すみませ……」

ピーピーピー！

「あ、ちょうど炊けた」

誠さんは二つのコップに麦茶を注ぎ足すと、コンロに火をつけた。

「すみませんが、麦茶二つ持って行ってください」

夕ごはんを食べた部屋へ向かい、コップを置いた。そのまま隣の仏間に移って、ご先祖様に朝のご挨拶をする。

「おはようございます。昨夜は厚かましくも泊めていただいてしまいました。ありがとうございます。誠に誠に素晴らしい方ですね……って私が言うまでもないですけど。もしお許しただけなのであれば、これからも誠さんと……」

ご先祖様から許可をいただく前に誠さんがやってきたから、軽くお辞儀をして立ち上がった。願わくば、これからも誠さんとお付き合いできますように。あわよくば、そういう意味でのお付き合いができれば最高だけれど、あまり多くは望まないようにしましょう。目の前にある幸せで満足しよう。

「こんなもんしかなくて……」

炊きたてごはん。たまご焼き。キュウリのお漬物。ナスのお味噌汁。これぞ日本の朝ごはんといった内容に、思わずため息が出る。

「とってもおいしそうです。誠さんは丁寧に暮らしてるんですね」

「丁寧なんてもんじゃないです」

「またまた、ご謙遜を……」

待ちきれずにお碗を持った。

「いただきます」

誠さんもお箸を取った。

「たくさん食ってください」

あったかいお味噌汁は、誠さんのやさしい味がする。艶やかに炊き上がったごはんは、誠さんの日々の積み重ね。無骨なたまご焼きは、誠さんの力強さ。手作り感のあるお漬物は……

「誠さんが漬けたんですか？」

「まさか」

「手作り感あるから、お手製かと思いました」

「おばが漬けたやつです。最近は毎日こればかり食ってます」

「おば様と仲良しなんです」

「夫婦で何かと気にかけてくれます」

「もしかして、例のおじ様の奥様ですか？」

「そうです。おじとは正反対で真面目な人なんですけど、ちょっと天然というか変わってて……」

おじ様夫婦の話になると、誠さんは幼い表情になった。

「そういうえば、今朝は何を話していたんですか？」

視線でお仏壇を示されて動揺する。

「泊めていただいたお礼を……あ、誠さんには改めて何かしらお礼しますので」

「気にしないでください」

「そういうわけには……」

「何のお構いもしてませんし」

「いえ、とても親切にしていたいです」

「次に誘いにくくなるので。本当に何もいらないますからね」

「……ありがとうございます」

今すぐ次の約束をしたかったけれど我慢した。誠さんはやさしいから、誘ったらきつと断れない。そこにつけ込めば、なし崩し的に自分のものにできちゃうかも……なんて最低すぎる考えを振り払うように、ごはんを口いっぱい頬張った。

し 赦

食後に温かいお茶をいただいてから誠さんの車に乗った。人気のない街を眺めながら地元ラジオを聞く。今日も暑くなりそうだ。私には予定はないけれど、誠さんは今日は何をするのだろうか。お米作りに休みはあるのだろうか。

「野菜、なくなる前に教えてください」

自宅まで数分のところで、唐突に誠さんが口を開いた。

「え、でも、結構たくさんいただいて……」

「どんどん育つから、どんどん食わないと。夏野菜は特に、最終的には戦いみたいになりますからね」

「戦い？」

「食える分だけ作ればいいんですけど、植えすぎてしまつて……」

「あ、そこに寄せてください」

昨夜と似た会話をしていると自宅前に到着した。シフトレバーをパーキングに入れて、誠さんは前を向いている。

「本当に、何から何までお世話になりました」

美しい造形の横顔に声をかけても返事はない。ドアを開けて降りようと思えば降りられるけれど、どうしたものか。

「あの……誠さん？」

「あ、すみません。ボーツとしてました」

「朝から運転させてしまって、すみません」

「いや、そういうんでなくて。今、後ろから野菜出しますね」

先に車から降りたのは誠さんだった。トランクを開けて、野菜とお米が入った袋を持ってきてくれる。私はゆっくりドアを開けて、足を地面に下ろして横向きに座った状態で袋を受け取った。

「重いけど、持てますか？」

ここで「家まで運んで」だとか「お茶でもどうぞ」だとか言って連れ込んでしまえば……

「待ってください！」

誠さんの手首を反射的につかんだら、意外にも冷たかった。

「はい。持ちますよ。部屋の前まで運びましょうか？」

誠さんは、感じのいい笑顔で私から袋を取り上げた。彼に触れた指先が熱い。「持って」じゃなくて「待つて」ほしい。連絡先も知らないのに、次の約束もしないで別れるわけにはいかない。今ここで別れたら、二度と会えない気がする。この人を逃したくない。

「そうじゃなくって……」

不思議そうに見下ろす誠さんの無垢な瞳に映った私の浅ましさといたら。

「うちでお茶でもいかがですか？」

「あー……」

誠さんは袋を持ったまま考えこんでしまった。困らせるつもりはなかった。罪悪感と後悔が襲ってくる。

「変なこと言っでごめん下さい。忘れてください」

「俺、昨日の夜、風呂入ってないんで」

それは私もだ。誠さんは私にお風呂を勧めなかったし、自分だけお風呂に入ることもしなかった。妙な空気になることを警戒したのだと思う。その気遣いを好ましく思った。

「美咲さんに汗臭いって思われたくないんで、今日はこのまま帰ります。また今度、誘ってください」

「ご迷惑じゃないですか？」

「全然」

その言葉に嘘はないと信じたかった。

「そうだ。今さらですけど、連絡先、教えてください」

誠さんは私の横から手を伸ばして、ドリンクホルダーに入れていたスマホを取った。微かに

汗のにおいがして、心臓がヒユツとなる。

スマホを操作する誠さんの顔が赤いのは日焼けのせい。眩しくて誠さんを直視できないのは日差しのせい。息苦しいのは湿度のせいで、心臓がうるさいのは温度のせい。全てを夏のせいにしてみても、それだけじゃないということは自分が一番よく知っている。

空も太陽も土も水も山の木々も、目の前にいる誠さんも、全てが輝いている。私は今、これまでの人生で最もビビッドな世界に生きている。これからどんな景色が見られるのだろうか。

小説の部 ふるさと秋田文学賞 受賞者のことば

桃栗三年書き八年

子どもの頃に食べた「じゅんさい」が、私と秋田との出会いでした。その後も温泉に行った友人に会いに行ったりといった薄い関わりはありましたが、初めて秋田の深淵を覗いたのは、数年前の「なまはげ柴灯まつり」でした。恐ろしいような、やさしいような空気に包まれて、畏怖という言葉の意味を知りました。

軽い気持ちで小説のようなものを書き始めて八年ほど経ちます。桃栗三年書き八年。何度も寄せては返す「いつそ書くのをやめようかな」の波にもまれながら、未練がましく続けてきました。そして過去最大のビッグウェーブに乗って届いたのが本賞の募集チラシでした。

かわいらしい秋田犬の写真を見た途端、脳内に鮮明なイメ

常田 あさこ



ージが流れ込んできました。男鹿線の車窓から見た、冬の日本海側にしては意外なほど明るい空。桶に入れられた焼き石と沸騰したお味噌汁。なまはげから落ちたワラを拾おうとして転んだ冷たさ。あのビビッドな秋田の地。根拠はないけど書けそうだと思います。

自分の全てでどうにか書き上げて、解放されたような気持ちになりました。私が書いたかったのはこれだと思いました。この作品で結果が出なければ筆を置く覚悟だったので、受賞を知ったときは、喜びと驚きと信じられない気持ちで混ざって「やっ……た！」という声が漏れました。そして今は、この賞に恥じない生き方をしなければと背筋の伸びる思いです。

今年が残念ながら授賞式は開催されませんでした。もしも受賞できたなら、作中に出てくる場所を訪れて、羽後町の農家さんが作ったお米を買って帰ろうと心に決めていたのに。状況が落ち着いたら、きつと行きます。

最後になりましたが、選考委員の先生方、県民読書推進班の皆様、西馬音内盆踊りを知るきっかけをくださった内田康夫先生と名探偵・浅見光彦坊ちやま、秋田県民ならびに秋田を愛する全ての方々に深く感謝いたします。ありがとうございます。

第7回ふるさと秋田文学賞 小説の部

ふるさと秋田文学賞佳作

近かっ
たり遠
かっ
たりす
るもの

青山
トーゴ・作

近
か
っ
た
り
遠
か
っ
た
り
す
る
も
の

横浜駅西口にある大きなホテルのカフェラウンジで杉山哲は妻と並んでいすに座っている。その色の和服や赤いノースリーブに身を包んで二つ隣のテーブルを囲んでいる中年の女性二人の前には小さなケーキがいくつも盛られたかごがある。

大柄な男に続いて彼女が入ってきた。髪は黒く染め戻している。スーツとパンツはグレー。彼女につき添ってきたその男が名刺を差し出してくる。手の甲にずいぶん濃い毛が何本も生えている。男は彼女のいすを引いて腰かけさせた。二人は哲たちの差し向かいに座った。

自営の不動産業者だというその男が、あいさつも早々にバッグから書類と白い封筒を取り出してテーブルにのせる。封筒は一センチぐらい厚みがある。

「ま、こちらの封筒があれで、こちらの書類は念書とか覚え書きのようなものですな」

妻がうなずき、グッチのバッグから封筒を出しテーブルに置く。中には、哲と彼女がベッドで半裸で写っている写真が入ったUSBメモリがある。

差し出された念書に哲と妻が、それから彼女と男がサインする。

妻は封筒の中身を確かめもせずバッグにしまい、被告人のように固まっている彼女の代わりに男がUSB入りの封筒を自分のブリーフケースに収めるとそれでもう儀式は終わりで、タイミングを計ったみたいに給仕が四人分のコーヒーを持ってきた。

ま、せつかくですし。男はいつしかネクタイの首元を少しくつろげている。促された彼女はうつむいたままカップに手を伸ばしたけれど震えるカップとソーサーがぶつかった。彼女は最後までひとこともしゃべらず、妻に向けて小さく頭を下げると、来たときとおなじように背を丸めて去っていく……これは現実なのか……思わず声が漏れそうになったとき、蟬しぐれが迫ってくるようにラウンジのざわめきが戻ってきた……だからあ、カチャカチャ……えーっ信じられない、ほんとなのよ……

……びびび、びびび……びびび……ん、ん……びびび、びびび……

ねばつく脛をひとさし指の関節でこする。蛍光灯のひもは、カメラのストラップを結んで枕の近くまで伸ばしてある。ひもを引く。時計をした左腕を顔に近づける。午前八時半。

なにかの行動の節目にとっさに時刻を確かめるのは長く記者をしてきた哲の癖である。身体を立てて、枕もとからペットボトルをつかんで水を飲む。

十五年も前のことなのに……忘れたいのにその映像は年を追うごとに鮮明になってくる。

右手で額をぬぐうと五十肩が痛んだ。疲れも抜けていない。横浜港のクルーズ船で新型コロナウイルスの感染者が確認されてから、深夜まで残業が続いている。小さく息を吐いたとき、二階から妻の足音がした。コルク張りのスリッパが安普請のフローリングをきしませている。

横浜の丘にあるこの家は上から見ると二階が凹の字型になっていて、すき間の部分がテント
つきのウッドデッキになっている。その六畳ほどの空間の左右がダイニングキッチンとリビング
だ。ウッドデッキの床板はそうとうにあやしい。長持ちすると聞いたヒノキに防腐剤を塗っ
たものの、二十年もたてば木口が腐食しているし、場所によっては床板を踏み抜きかねない。
堆肥のような臭いがしているのは、ウッドデッキの下に枯葉や虫の死骸が積もっていて発酵し
ているからだ。

ぎっ、ぎっ。また頭の上で音がしている。哲は耳を澄ませた。大阪で単身赴任暮らしを四年
続け、一年前にここに戻ってから身に着いた癩だ。盲人は足音の鳴り方で近づいてくる人間の
機嫌が分かる、と何かで読んだ気がする。妻は小柄で身体つきも細い。けれども乱暴に床をこ
すり踏みしめるその足音は、哲の胸に錐で穴をあけるような痛みを揉みこんでくる。

妻が慰謝料を受け取って念書を交わしたあの儀式以来、夫婦の間でそれを蒸し返すようなこ
とはなかった。穏やかに再出発したつもりだった。けれどもあれからしばらくして、ふいに妻
が荒れるようになった。嵐にでも打たれたみたいに身体を揺すって哲の不貞を責め、なじり、
不倫相手の名を叫んでは泣きわめいた。嵐。そう、嵐。そんな嵐のような日々が何年か続き、
哲と妻は肌を合わせることもなくなった。「ごはん、いるの」「います」——交わす言葉も

最低限のことになってしまった。哲が大阪から戻ると、妻は寝室を分けようと言いだした。妻は息子には「お父さんのいびきがひどいから」と説明した。ウイルスが体内で増殖するように家の隅々にも重苦しい何かが広がり、気がつくとりビングにもダイニングにも哲の居場所はなくなっていた。

玄関の黒くて重い引き戸が砂を噛みながら閉まる音が聞こえた。午前九時。妻は週に二度、不動産会社でパートをしている。

いつてきます、を彼女は言わない。

いつてらっしゃい、と哲は口にしてみる。つぶやくように。

哲はタンスと机、ベッドが詰め込まれた一階の四畳半の隙間をぬって窓際に進んだ。左の四畳半に息子が寝ている。右がかつての夫婦の寝室で、今は妻がひとりで使っている。

滑りの悪い障子を引くと、庭木のかなたを薄い雲がゆつくりと流れている。

三十歳で結婚して二十数年。大学の後輩に紹介されて何度か遠距離で行き来し、そのうち、なんとなく自分もそういう年齢なのかと思った。つきあっていたもう一人の女性とは別れた。五つ下の妻は新婚旅行のハワイの人けがほとんどないビーチで水着のブラを外した。波打ち際を駆け寄ってきて哲の首に両手を回してきた。哲は抱きとめた。結婚翌年、警視庁を担当して

いたときに地下鉄サリン事件が起きた。ずいぶん忙しかったはずなのにその翌年には息子が生まれた。自分たちは幸せな夫婦だと思っていた。

四畳半の長押に吊るしてあるワイシャツとズボンを身につけ、洗面所でヘアワックスをすくって長い髪をざっと整える。こめかみのほうに行くにしたがつて吊りあがる太い眉と三白眼。だったら軽くパーマをかけたら見た目が柔らかくなるよ、と言ったのは結婚前の妻で、いろいろ髪形を変えていない。

二階に上がると、いつものように妻が、朝食のおかずを哲と息子のぶんをそれぞれの皿に盛り付けてテーブルに並べてあった。

緑色をしたその皿は楕円形をしていて、左から、短冊状に切って炒めて塩コショウをしたキヤベツ、目玉焼き、チーズを混ぜて炒めたプチトマトがあり、目玉焼きの手前には焦げ色がついた太めのソーセージが二本、主役の貫禄を見せている。

哲は自分用のコンビニの食パンを冷凍庫から出す。秋田のコメ農家の息子と結婚したのに妻は有名店の食パンを好む。「わたしのは食べないでください」と念を押されている。

トースターのスイッチをひねってテーブルのいすに腰かけた。

大学生になった息子は、留年した授業料を親に返すと言い張って、アルバイトを掛け持ちし

ていている。

—— っぽい食べなきや。若いんだから。

哲は右手に持ったフォークで自分の皿のソーセージを刺し、それを息子の皿に伸ばした。皿の端にそれを押しつけるようにしてフォークの先をひねったら皿がぐらりと揺れて、キャベツの山がテーブルの上にずりりとこぼれた。目玉焼きも皿から落ちる寸前になっている。

あつ、と背中から声が出た。

いつの間にか起きだしていたらしい息子が皿を見つめている。

哲は慌てて左手の指でソーセージを外し、滑り落ちたキャベツも集めて息子の皿に戻した。

ソーセージは二つにちぎれそうなほど原型を失っている。前髪のすき間からのぞいている息子の目が、汚ったねえなあという感じに細まった。哲は見たくもないのに出窓の手前にあるテレビをつけた。へですのソーシャル・ディスタンスはこのぐらい……

向かいに腰掛けた息子は、いつもなら目玉焼きを崩さずに食パンにのせて食べていたはずなのに、フォークで目玉焼きを真つ二つにした。黄身が垂れているそれを、パンを二つに折って挟んでかぶりついた。喉ぼとけがぐいと動いたかと思うとまたぐいと動く。もうひと口。

あとから入っていったパンが、先に入ったパンをぐいぐい押し流しながら胃に落ちていく様子

が見えるようだ。

牛乳を流し込んだ息子がフォークをごとりと置いた。

「目玉焼きだつてあるのに、ソーセージ三本は多すぎでしょ」

哲はそれには答えず、目玉焼きをまるごと口に入れた。

「どうして訊いてくれないの。勝手なことする前に。ソーセージ、もつと食べるかつて、さ」

息子のTシャツの胸元に目をやりながら、哲は咀嚼を繰り返す。

「ねえ、怖い顔ばっかしてないで、なんとか言つてよ」

二度三度噛みしめたときほおの内側を間違つて噛み、ずんと痛みが走った。顔を上げると、

息子は哀れみと軽蔑が混じつたような目をしている。妻もときどき同じ目をする。

「あーあ、睨まないでよ、ねえ」

ひりつく口の中を舌の先でまさぐりながら、哲は家を出た。

横須賀線の最寄り駅まで早足で二十分かかる。片側七人掛けの座席の真ん中に腰を下ろすなり、今日は何人乗っているかと数えた。東京・汐留にある通信社のニュースセンター・整理部委員というのが哲の肩書である。職制でいうと部長であるが部下はいない。勤務は正午から午後八時までということになってはいるが、いくら残業しても管理職だから給料が増えるわけも

なく、実態はチェーン居酒屋の名ばかり店長に近い。記者は八百人いて、在宅でのリモート取材も始まっているらしいけれど、哲の職場ではいっこうに在宅勤務という言葉を聞かない。

整理部のなかで、政治部や外報部のような看板部署の原稿を扱うのは第一関門という。哲がいる第二関門の仕事は、地方支社局から送られてくる原稿の手直しで、良く言えば、若いデスクを指導するベテランデスクということになるのであろうけれど、若い記者の原稿には間違が多い。若いデスクにも。だからその仕事は「水産加工場のおばちゃん」に近い。サバだとかタラだとかがどさっとテーブルに放り込まれると、手にした包丁で頭と内臓を切り落とし次々にバケツに放り込むあれである。

着席するなり、傍らに居座っているプリンターが緑色のA4サイズの紙を吐き出した。原稿を印字したその紙が出ると同時に、目の前の大型ディスプレイにも原稿の見出しが表示された。

紙を手に原稿を読む。読み終わると、また見出しに目をやった。

〈3連休の北海道で自粛要請 道民の外出で鈴木知事〉

で、でないだ字づらがゆるいし、なんとも説明調だ。赤鉛筆で書き直してみる。

〈北海道3連休も外出自粛へ 知事が要請を検討〉

背もたれが鳴るほど深く身を預け、肺の奥まで息を吸いこむ。身体を戻すと、受話器を取って四桁の短縮ボタンを押した。社会部と一緒に仕事をした後輩は支社のデスクになったばかりだ。

「すごくいい感じで書けてる。見出しも文句なしだね」

電話を切った哲は、モニターに表示されている原稿を一字一句直さずに校閲部に送った。言い争いは家の中だけで充分だ。哲は自分でひねり出した見出しを塗りつぶした。

最終電車で家に戻ると日づけが変わっていた。シャワーを浴びて缶ビールを一本。バーボンのハイボールも二杯。店で飲むやつの方が倍ぐらい濃い。何も考えない。身体が重い。まどろみは短い。ベッドに横になり、あ、くる、と感じた瞬間、眠りに落ちた。

……りりりりり、りりりりり、りりりりり……

哲は枕元まで伸ばしてある蛍光灯のひもを引く。午前七時ちょうど。この時間に電話してくる相手は決まっている。

(わるいですね、朝はやくに)

母はかつては家の固定電話にかけてきた。それを妻がとって哲を電話口まで呼んだ。「電

話。お母さんから、ほら——。母はいつからか哲のスマホにばかりかけてくるようになった。

（まだ寝てたんでしよう）

五百キロも北にある古い家の薄暗い食卓で受話器を握っている母の顔が浮かんだ。

「いや、なんもなんも。なんかあった」

（千春ちゃんね、退院できるんだって）

父の一番下の妹の千春さんが去年の暮れ、胃の検診で腫瘍が見つかったことは聞いていた。

好ましくないほうの腫瘍であることも。

お盆や祝いごとの日、父の妹三人の家族はかならず哲の実家に集まった。子どもたちを寝かせたあと、大人たちが夜遅くまで話したり酒を飲んだりしているのをまだ小学生だった哲は障子越しに聞いた。言葉として聞き取れるような会話ではなくて、ぼそぼそ話し続けている声と音の中間みたいなさざめきの中にときおり「あいーっ、おかしいわぁ」というほんわりとした合の手が混じることがあった。それが千春さんだった。

（あのね、来られる？ もしできるのなら……今週末とか）

唇をなめた。舌の表面が乾いてざらついている。

(やっぱりコロナだから忙しい?)

なんの予定もなかった。急に帰省することになっても、妻は目を合わせずに「どうぞ、ご自由」と言うだろう。

「……いや、行がねばなんねべ……お世話になったし」

コロナが始まってから、たまの休みは寝てばかりだ。妻の顔もろくに見ていない。ほんとうは帰省したりできるような状態ではないのかもしれない。

電話を切ると、妻が作り置いてあったベーコンエッグを牛乳で流し込んだ。冷めたベーコンはサラミみたいで、食べ終えた皿の上で脂が白く固まっている。

家を出て、みどりの窓口に寄った。三日後の日曜日に日帰りで往復する秋田新幹線の切符を買ってホームに降りると、上り電車が滑り込んできた。座席の真ん中に腰かけると電車が速度を上げてゆく。薄緑色をした丸いガスタンクや紫とピンクに塗り分けられたビルに目をやってみると、リズムカルな振動が腰と背中を打ちだした。踏切だった。

遠ざかっていく音と入れ替わるように胸に迫ってくるものがあつた。

千春さんは、いまの潟上市にある呉服屋に嫁いだ。哲の実家は男鹿半島の内陸にある。秋田市内の高校に奥羽本線を通っていたころ、雪で道が凍ると最寄り駅まで原付バイクで行けなく

なり、冬だけ奥羽本線の大久保駅すぐそばにある千春さん夫婦の家に下宿させてもらった。部屋は車庫の二階でサッシ窓を開けると目の前が踏切だった。

ディーゼル機関車のがらがらという唸り……骨が押しつぶされるようなレールのきしみ……雪の群れを連れてくるような長く尾を引く汽笛……。

あの夜からもう四十年になるのだ。白い綿のように降っていた雪と薄汚れて暗かった警察署の廊下。忘れたいのに浮かんできるところがあるのはどうしてなのだろう。

新幹線の切符を買った翌日は春分の日だったけれど、休める雰囲気ではなかった。帰宅早々にシャワーを浴び、濡れた髪のまま二階のリビングで缶ビールを出したところでスマホが震えた。

（遅くにごめんね……あのね）

またしても母からである。哲は息をのんだ。

（千春ちゃんがね、急に悪くなってまた入院したんだって。容体。きょう）

「……その病院ってお見舞い、大丈夫なのかな」

（それがね、家族だってほら、なんていうの、あの白い服着て、透明のカーテンみたいな）

「感染防止の？ コロナじゃないのに？」

（そうしないとだめで、家族以外の人は病院にも入れないんだって。章勝のりかつさんもね、せっかく来てもらってもいまはちょっとって……規則だからって……あなたは神奈川県の人だし、こういうときだから仕方ないんだろけどね）

夫の章勝さんは国鉄、いまのJR東日本の運転士をしていた。豊かな髪をオールバックに整えて、千春さんの横で微笑んでいた。千春さんは夫の親の家業を時代に合わせて、着物だけでなく洋服も扱う店に模様替えしながら一人娘を東京に嫁がせた。

（千春ちゃんをね、励ましてあげてほしいの）

缶ビールを細長いグラスに注ぐ。白く立ち上がってくる泡を見ていると、飲んでもいないの口の中が苦くなってきた。秋田駅の裏で騒ぎを起こした哲が警察署に連れていかれたのは高校二年の冬だ。柔道部の練習をさぼって缶ビールを買って飲んだ。作業服の男二人と殴り合いになった。原因は目が合ったとか合わなかったとかそのたぐいのことだ。雪の夜更けに車を走らせて身元引受けに来てくれたのが千春さんだった。章勝さんは寝台急行に乗務して留守だった。

一階の四畳半に戻った哲は原稿用紙を取り出した。万年筆で型通りの見舞いの文章を綴って

みたけれど破って捨てた。障子を引いて窓越しに空を見上げると月があった。ごみ処理工場の白くて長い煙突の先が赤く点滅している。

その赤い光を見ているうちに胸の奥がぞわりとした。横浜に戻ってからは禁煙していたのに、コンビニに走り、店先で立て続けに二本吸ってようやく部屋に戻った。

書いては破りしているうちに、ベッドに伏している千春さんに、白い防護服を着た章勝さんが寄り添っている姿が浮かんできた。千春さんはよく、居間の石油ヒーターのわきに横座りして絵本を読んでいた。好きなの、と言っていたのはこんな話だった。

南の海に愛しあっている小さな魚のカップルがいました。雄の魚は言います。「僕はとも幸せだよ」「わたしもよ」——でも二匹は運悪く漁師の網にかかってしまい、生きたまま売りものにされてしまいました。雌の魚は泣いています。けれどその二匹は同じ人間に買われて、狭い狭い一つの水槽で飼われることになりました。雄の魚は言いました。「僕はとも幸せだよ。君といつも一緒にいられるんだから」「わたしもなんて幸せなんでしょう」

水槽の中で見つめ合っている二匹の魚のへたくそな絵を書き終わると、障子の向こうが青白

くなっていた。ベッドに入ったものの不思議に気持ちがあたかぶっていた。

どうしてなのか、またホテルのあの場面が浮かんできた。男の手の甲に生えていた濃い毛。

腕時計のバンドのあたり……。あの儀式以来いかがわしいことなど一度もしていないのに、妻はまだ哲のことを信用していない。

儀式が終わったあと、妻は哲の先になってラウンジを出た。紺色のパンプスのかかをと鳴らしながら。そうだった。妻は振り返りもせず横断歩道の上で叫んだのだった。

「このお金なんに使おうかね。ぱーっと使っちゃわないとね」

妻は哲の返事など待たず大股で歩いていった。足が動かなかった。どんだん妻との間隔が広がっていった。やけくそになつて言ったんだろう、と受け取ったのだった。あのときは……。

哲は煙草の箱から一本抜いて指で挟んだ。

いや、そうじゃなかったのかも……。あれはありつただけの勇気を振り絞って言ったのではなかったのか……。妻なりの精いっぱいの優しさだったのではないのか……。

あの儀式に臨む前「やりなおそ」と言ったのは、哲ではなく妻だった。嫌がる哲を説いて二人で夫婦カウンセリングに誘ったのも。

火のついてない煙草が指の間で二つに折れた。

妻は去年の父の日、評判のいい横浜駅ビルの魚屋で肉厚の国産鰻を買ってきた。哲の好物である。妻も息子もあときは笑っていた。哲も。七月の妻の誕生日に哲は夏物のシルクのストールを贈った。けれど八月の哲の誕生日にはプレゼントはもらえなかった。少し前に、哲が金属ごみの日を間違えて出してしまい、またしても言い合いになってしまったからだだった。

夫婦の距離ってなんだろうと思う。人間は寝て食べて出す。朝起きて寝不足ならば不機嫌でぐっすり寝たら気分爽快だ。もの言いだって穏やかだ。でも人間はいつもそうとは限らない。聖人君子ならいざ知らず、たいがいの人間は気分だけでなく日によっては体調まで微妙に変わるから相手との距離もそのつど変わる。妻なり、夫なりは、その時その時に相手が発した言葉やとった行動をなんとなくひとくくりにして、「この人はこんな性格なんだ」とぼんやり思い込んでいるだけなんじゃないだろうか……。

でも、こんなことを考えてしまうから自分はいつまでたってもだめなのかもしれない。

帰省が中止になった日曜日。哲が目を覚めたのは昼近かった。パンをかみながら、ウッドデッキのリフォームの話をもう一度しようと考えた。テントと床板である。大阪から戻ったばかりのころ、哲が提案したのだった。妻はあのととき、いいかもねと言った。だったらテントじ

やなくて屋根をつけようか、屋根だけでなく温室のように囲おうか、床はむき出しがいいのか木の板を敷くべきなのかと話し合った。哲としては屋根さえあればよかったけれどもその場では決まらなかった。ときどき哲が話を持ち出したけれど妻の考えはそのつど変わり、やがて話題にものぼらなくなり、それつきりになっている。

哲は使い終えた皿を洗いながら話の順番を考え始めた。考えれば考えるほど、これはいいアイデアに思えた。ウッドデッキには妻が育てているレモンやブルーベリー、あとは名も知らぬ植物の鉢がいくつもある。腐りかけた床板を撤去するためにはたくさんの鉢を別の場所に移さなくてはならないし、そのためには妻の同意も得なくてはならない。

掃除機をかけ始めた妻の背中に話しかけた。

「ウッドデッキの改修、そろそろやろうか」

返事はない。

よく見ると妻の耳からコードが伸びていた。

「ちよつと話があるんだけど」声を二倍ぐらい上げた。

ゆっくり振り向いた妻がイヤホンを外しながら「何なのよ、怖い顔して」と言う。

「いや、別に怒ってなんかないよ。もともとこんな顔だし」

「で？」妻が掃除機のスイッチを切った。

「ウッドデッキだけど、工藤さんとこに頼んだらいいんじゃないかって思ってるんだけど」

息子の中学の野球部の父母会で知り合った工務店の名を挙げた。

「ほかにもっといいところ、あるんじゃないの」

「どこに」

「探せば？」

あなたが、という言葉が続いていそうな言いぶりだった。

「でも工藤さんならたぶん良心的だよ。三十万ぐらいじゃないの」

妻が、こういうのがいいかも、と言ってテーブルに置いたホームセンターの折り込みチラシを哲は机の引き出しにとってあった。据え置き式のサンルームがそのくらいの値段だった。

「でも工藤さんに頼んでなにか瑕疵があったら責任はどうなるの」

責任、という言葉に哲の身体がこわばった。

「あなたの、そういう思いつきでものを言うところが問題なのよ」

「だったら、なんていうの……ほかにあてがあるの？」

「よく考えて。工藤さんのところを候補にするにしても、ほかにもやり方があるんじゃないの」

哲はとっさにうつむいた。そうすれば長い前髪に顔が隠れる。

「そういうときはふつう、合見積もりを取るもんでしょ」

だったら、あなたが働いている不動産会社でリフォーム業者を紹介してくれればいいのに、と哲は床に目をやったまま思う。

「だってこの間は、温室みたいな感じがいいって」

「あれは、そういうのがいいかもねって言っただけじゃない。そうするって、誰が決めたの」
胃袋の底がぎゅつとつかまれるような感じがして、胸が苦しくなってきた。

哲は鼻から大きく息を吸い込んでから言った。

「じゃ、考え直してみるわ」

「ほらまたこうだ」

「なにが」思わず声が高くなってしまった。

「あなたっていつも面倒なことから逃げてばかり。最後は怖い顔をしてそのドア、ばたん
って閉めるんでしょ」

いつものように会話が終わってしまった。

三月も今日で最後である。社内レストランで出前を頼んだスパゲティーナポリタンを流しこみながら哲は原稿を読み飛ばした。座りっぱなしで気がつくと午後十一時を回っている。ついさつき〈秋田で二十代男性の感染確認 北海道からUターン就職〉という記事を配信したばかりだ。

モニターに表示されている記事の見出しは、山形で初の感染、1人確認……愛知で8人感染、県内計178人……。通信社とは面倒なものだ。新聞社なら夕刊と朝刊の締め切りまでに「その日の感染者と死者数」を把握すればすむ。哲たちはなにかが起きるたび、発表があるたびすぐに短く速報し要素を加えて差し替えていかななくてはならない。オーバーシュート、ロックダウン、クラスター……横文字がわがもの顔で飛び交っている。

四月に入った最初の土曜日哲は出勤した。かろうじて午後十時前に帰宅すると、玄関のたき箱に箱が置かれていた。宅配便だ。段ボールは雨でふやけている。

〈よさそうなの、注文しておきました〉

何日か前に妻が冷蔵庫にメモを貼っていたのを思い出す。空気清浄機。一抱えもあるそれが四畳半に運んで梱包をはがした。出勤前や休みの日、家の近くの煙草屋にある灰皿で一服するのが日課になってしまっている。妻は家の中に持ち込む残り香が嫌いだと言った。息子まで自

分の部屋に香水を吹くようになった。けれども妻は、今すぐに煙草をやめろとは言わないのだ。使用説明書を読む気にもならず、電源を入れて緑のスイッチを押すとファンが回りだし、そのままにして階段を上がる。二階の明かりは全部消えている。キッチンには二人ぶんの食器が洗われて水切りに並んでいた。青い皿に盛られた鮭の西京焼きは切り身が薄い。コロナ騒動以来、妻は食材のほとんどを宅配でそろえるようになったからスーパードに行かない。哲は凍ったご飯を電子レンジで解凍し、キムチをのせた。缶ビールを一本。見てもいないテレビをつけたまま、あつという間に食事が終わったとき、そういえば今日もそうだったかと気がついた。妻と息子の顔を見ていない。言葉を交わしていない。明日は休みだ。ステイホームはつらい。でもそんなことはコロナ騒動が始まる前から知っている。

翌朝。近くのコンビニの前から見えるランドマークタワーに重たげな雲がかかっている。昨日も母の携帯に電話したが出なかった。実家にも電話したけれど父も出なかった。

哲はジーンズのポケットからスマホを取り出した。母はこんどは出た。

(ああ、ありがとね。なんども。携帯……わたしの電話……なんども悪いね、マナーモードにしたままだったから)

病院から帰ったときの章勝さんの食事の世話をしに出掛けたり、親戚の酒屋の手伝いをして、りで忙しかったのだと言った後、母はしばらく黙り込んだ。やがて、

（あのね、千春ちゃんね）

「うん、どうした」

（あのね、体重ね、もう二十八キロしかなくなってるんだって）

哲はまさかと訊き返した。千春さんは、自分では小鳥が餌をついばむぐらいしか食べないのに、下宿していた哲のために作る弁当はとにかく大きかった。

「いっぱい食べなきゃね。若いんだから」

白米は二合ぐらい詰まっていた。昼めし時間になると同級生が「きょうはなんのオカズだ」と集まってきた。おかずの定番は唐揚げに肉だんご、さらにとんかつの卵とじまでのついていた三種盛りだった。友達が遊びに来る日のおやつはいつもシュークリームだった。話し上手なやつが何か言うと、何がそんなにおかしいのか横座りした膝を手でばんばんと打ち、ふっくらした体を二つ折りにして笑った。さらに何か言うと「あら、ほんとなの」と言ってまた笑った。

哲は、二十八キロ、とつぶやいた。

その二日後、七つの都府県に緊急事態宣言が発令された。

宣言から七日目の月曜日。駅までの途中で雨が降り出した。電車に駆け込んでハンカチで顔をぬぐっているとはっとした。乗客は自分一人だけだった。

午後二時を回り、社内レストランで出前を頼んだ。かき揚げそばのつゆは醤油が強すぎる。哲は、しょっぱ、という言葉はのみ込んで、けれども、つゆは飲み込まないようにしながら、配信済み記事の見出しを表示している画面に目をやった。福岡で新たに33人感染、県内365人に……富山で新たに14人感染、市民病院はクラスター……。感染者の姿は目に見えず、数字だけが積み上がってゆく。聞き慣れない横文字と同じように現実感がなかった。

午後はさらに原稿の量が増えた。竿灯祭りが戦後初めて中止と決まった。淡い思い出が浮かんできたとき、机のスマホに着信履歴があるのに気がついた。表示は〈秋田の実家〉

そっと窓際に移り、実家に電話すると父が出た。母は千春さんの家で待機することになって急に出かけたらしい。嫌な予感がした。母の携帯にかけなおすと、

（あ、ああ、ありがとね）と言ったきり、電話の向こうで母が鼻をすすり始めた。

哲は片方の耳を手でふさいだ。

（ごめんね、お仕事中ののに）

「いいってそんなごと。それよりか」

(うん。千春ちゃんね……駄目だった。ついさっきだったって)

自分の唇が固く結ばれていくのがわかった。その唇のまわりを手のひらでなんどもぬぐっていると、母が鼻をかむ音がした。

(……葬儀も火葬も親戚だって立ち会えないんだって、肺がんなんだよ。コロナで死んだんじゃないのに。章勝さんだって、薬で消毒した棺にさわられるだけなんだって……それが……最後のお別れなんだって)

電話を切った哲は十八階の窓の外に目をやった。

窓ガラスを伝う雨のしずくで東京タワーが赤くにじんんでいる。

——東京、か。

十八歳まで過ごしたふるさとがやけに遠く思えた。どうしてなのか新型コロナで亡くなったコメディアンのことを思い出した。笑わせる人と笑う人。千春さんはもう笑えない。

四十年近く前の薄暗かった警察署の廊下がまた浮かんできた。調書に署名させられたあと、哲は廊下で待たされていた。すると、いつもの千春さんとは違う、半分かすれたような声が漏れてきた……。

警察署を出るとき千春さんは言った。

「哲ちゃんは誤解されやすいの。今までどおりやればいい。あなたはきつとやれる。さ、帰ろっ。ほら、笑って」

自分の親にも高校にも、警察から通報はされなかった。それだけではなかった。哲の知らぬ間に、千春さんが相手に治療費まで払ってくれていたことを何年も後で知った。

哲が大学に進みこうしていま仕事ができているのは、自分だけの力ではない。

家に戻った哲はパソコンで弔電をしたためた。

突然のご訃報に接し心からお悔やみ申し上げます。いつも太陽のような笑みをたたえて、わたしたち親族に前を向いて生きることの大切さを教えてくださった千春さんです。世界中が騒然としておりますが、千春さんならきつとこう言っただけを励ましてくれたことでしょう。

「大丈夫。いつまでも悪いことは続かないから。笑いましょ」

長い間、本当にありがとう。安らかにご永眠ください。

今夜ぐらいは妻と話をしたいと思った。とうに眠っているだろう。安普請の薄い壁なのに、

その壁がレンガみたいに見える……。

哲は帰り道にコンビニで買っておいた二つのシュークリームを袋から出し、ウイスキーの口ツクで流し込んだ。朝からの雨はまだ降り続けているようだ。

臉を閉じているとウイスキーのグラスがからんと鳴った。

翌朝、障子を引くと何日かぶりの青空だった。でもずっと雨が続けていたから、哲は折り畳み傘を鞆にしのをばせて家を出た。

午後七時のニュースが終わり、哲は凝り固まった肩を回しながらコーヒーをすすっている。手元に一本の配信済みの記事がある。山形県で休校中の小学校三年の女子児童が、自転車を通りかかった橋から川に転落して亡くなった。原稿では「女子児童」と匿名になっている。しかも原稿はたったの十五行。山形支局は仙台支社の管轄だ。

哲の手が卓上の電話にのびた。女性のデスクが応じた。

「誰が亡くなったかというのはニュースの根幹じゃないのかい」

哲は珍しく注文を付けた。子どもを諭すような声だった。

(でも……要りますかね、それ。県警も発表してませんよ)

少し前まで経済部で株式を担当していた彼女は、いつも長い髪を後ろでひとつに結んでいた記憶がある。それもたぶん、きつく。

「だったら独自取材で名前を割り出すのが記者なんじゃないのか」

(でも……、それ、地合いを考えてくださいよ。今はコロナでそれどころじゃ)

彼女が電話を切ったような空気が伝わってきた。

「いいからトライさせてみるって。記者の経験にもなる」

電話の向こうで小さく舌打ちした気配があった。哲は彼女が受話器を置くのを確かめてから電話を切った。

フロアの隅の自販機でコーヒーをもう一杯買って席に戻った。どうしてこんなことにこだわっているのだろう。ただのベタ記事なのだ。載ったとしても……。

自分たちの仕事は良いものを読者に読んでもらうためにあるのであって、職場の空気が悪くなるなんてのはこの業界じゃ当たり前——。そんな先輩たちの横顔を、まだ記者だった哲は誇らしい気持ちでながめていたことを思い出す。

二〇一一年三月。東北を津波が襲い、哲は岩手県を担当するデスクとして社会部から送り込まれた。本社の応援記者も三十人もいた。彼らの宿舎になったのが古びた旅館で、哲はその一

室に腰をすえ、記者たちが上げてくる原稿を一手に引き受けて本社に送り続けた。一本一本読み込んで足りない取材を指示し、見出しを直し……。デスクは一人だけだった。感情も昂ぶっていた。何も言わずに原稿を突き返したことだってあった。

「行きたい場所に行って、聞きたい人から話を聞いて、自分の好きな行数で記事を書いていいぞ」

長い記事は二百行になったこともある。そのスペースは新聞なら一ページの半分近くを占める。本社に送ると「長すぎる。削れ」と言われた。「人の生き死を二十行かそこらでまとめたいつもの記事とは違うんですよ。二百行あったって十分には伝わらないかもしれない。一カ月ここにいて一本、これがわたしの原稿ですと言えるようなものを書けたらそれで十分じゃないんですか」

一日歩き回っても納得ゆく取材ができなかった記者が戻ってくると居酒屋に連れ出した。

僕にしかな書けない一本を書きますよ、とひげ面を輝かせる記者に、うんうんと頷いていた。それにしても……やっぱり自分が指示したことはイレギュラーだったのかもしれない。

三カ月が過ぎて本社に戻ったとき、何かが変わっていた。張りつめすぎた糸が切れてしまったような重苦しさが社会部全体に漂っていて、哲に話しかけられた部員たちの視線は、ジャン

グルで兵士が味方を探すときみたいに動いた。社内的に快適な距離というのは、それぞれの意見が他人の意見で成り立っている環境のことをいうのだと気づいたのは夏ごろだったか。哲はまもなく関東支社のデスクへの異動を命じられた。

昔のことを思い返していると時間のほうが勝手に流れたみたいでもう二時間が過ぎていた。仙台支社から差し替え原稿が届いた。

新しい事実が入っていた。橋の近くの土手に、自転車のわずかだけどまっすぐなタイヤ痕があったこと。欄干から川までの高さは七メートルもあったこと。そして、亡くなった女兒の名前——。見えるはずもない現場が見えたような気がした。その女の子の家族の姿まで。女性デスクに電話した哲は「よく書いてたよ」と言ったきり、しばらく言葉が出てこなかった。

「次はさ、コロナでつらい思いをした人の家族に会って、このウイルスの怖さを語ってもらえるといいかもね……どんな人だったか知りたいよね。てか、知ってほしいよな」

翌十五日朝。滑りの悪い障子を引いた哲は思わず目を細めた。四月だというのに、蟬でも鳴きだしそうな陽ざしである。二階で冷蔵庫を開けようとしたとき、先に出かけた妻のメモ書きに気がついた。

〈今週末は横浜駅ビルの魚屋で鰻を買ってきます〉

哲はメモを手に取り、見慣れた丸い文字をしばらく見つめていた。

正午に出社して二時間近く過ぎ、夕刊作業が終わった哲の腹が鳴りだした。学生アルバイトたちも巣ごもり生活をしていて、食事の買い出しもしてもらえなくなつた。遅い昼めしを外でとうろと思つたけれど近くには営業している店もなく、哲は本社地下のコンビニで買ったサンドイッチと缶コーヒーを手に汐留の地下街を歩いた。

立派すぎるビル群のすき間に、申しわけ程度にベンチが十脚ほど据えられている。広場に近い端に腰かけてサンドイッチの包装をはがしていると、鳩が二羽、よたよたと寄ってきた。

哲は片足で灰色の敷石をどんと踏んだ。

飛びのくかと思つたが、二羽の鳩はなにごとくなかつたかのように哲の目の前で鬼ごっこでもしているかのようにしている。

その二羽が動きを止めて向かいあつた。

右にいて一羽がもう一羽の首のあたりにくちばしをちょんちょんと当て始めた。

鳩にはソーシャル・ダンスは存在しないらしい。

ちょんちょん。ちょんちょん。されるほうの一羽は気持ちよさそうに、身をゆだねている。

毛づくろいか、虫取りでもしているのかなと思った。

やがて、二羽がお互いのくちばしを相手のくちばしに突っ込み始めた。なんども。

ケンカかと思ったたら、これもまたそうでもないようなのである。

動きがやさしいのだった。

哲はサンドイッチを食べることも忘れ、それに見入っていた。

ふと思いついて〈鳩〉〈キス〉とスマホに打ち込んでみた。

——求愛行動。

神戸ポートタワーに近いホテルで迎えた白い朝がよみがえってきた。

十五年も前に横浜のホテルでの儀式を終えて間もなくのころだ……。

小学生になったばかりだった息子を連れ、一泊で出掛けた。

ベッドは二つあった。息子をソファで眠らせてから、哲は妻が背中を向けているベッドにお
そるおそる身を滑り込ませた。

妻の背中は小さくふるえていた。

どれぐらいそうしていただろうか。

やがて妻はくるりと哲のほうを向いた。寝返りをうつみたいに。哲の肩や胸におずおずと触

れてくる手の感触は哲を緊張させた。互いの息遣いが高まった……。

目が覚めると、白いレースのカーテンごしに秋の柔らかな光が差し込み、すぐ横で妻はおだやかな顔をして寝入っていた。

シーツを肩まで引き上げてやると、妻がうつすらと目を開けた。

妻はシーツの端を少しめくった。哲が見やすいように。

ここ、さわってみて。

哲は、あわいスイカの模様のように腹をうねっているいくつもの妊娠線に指の先をはわせながら、いまからほんとうの生活が始まるのだと信じた。

——おれはあの夜、ぎりぎりまで怖気づいていたんだった。

哲はベンチから立ち上がった。さっきの鳩のことを今夜、妻に話してみようか。

その場面を想像しながらマスクをし、会社のビルに向かって歩き始めた。

小説の部 ふるさと秋田文学賞佳作 受賞者のことば

物語の切なさ

三年前、本賞の随筆・紀行文の部に応募した『譲り葉』で最高賞をいただき、内館牧子先生から当時「あなたは絶対に小説が書ける人です」と激励していただいた。ならばと書いてはみたものの、できればは芳しくなく、書いていて楽しくもない。

自分の書くものに自信が持てなくなり、やがて限界を感じるようになった。それでもなんとか書き続けられたのは、大きくて柔らかな手を広げて幼子を迎えてくれる母のように、毎年作品を募ってくれるこの賞があったからだろう。わたしは次回もまた最高賞を目指して小説を応募するだろう。では次は何を書こうか。材料は定かではないけれどひとつだけ決め



青山 トーゴ

ていることがある。どんな物語を紡ぐにしても、そこに必要なものはなによりも「切なさ」ではないかとわたしは考えるようになった。選考委員のおひとり、西木正明先生の『凍れる瞳』（一九八八年）を拝読し、はっと気がついたことがある。捕虜虐待の罪で処刑される男と甲子園を目指して投げ合った不世出の大投手スタルヒン。しかし物語の視点人物は二人の男をつなぐひとりの女性である。おそらくこうなるのだろうという結末に向かって物語は進んでいく。じれったい、いやそんなことじゃだめだろう、なんでそうしちゃうんだ。わたしはいっしょかその女性に心を寄せてページをめくっていた。この「心を寄せること」を導くのが小説の技であり、この「心を寄せた状態」が読者にもたらず気持ちだが、切なさなのではないか。

今回の受賞のご講評で内館先生から貴重なアドバイスをいただいた。

「一度自分から徹底的に離れた虚構を書いてみると今後にいい影響を与えるのではないか」

おそらくわたしが迷い込んでいた迷宮はそのあたりにあったのかもしれない。その言葉胸にこれからも書き続けてまいります。おそらくはまた遅々とした歩みではありましようが。

最後に、塩野米松先生はじめ、ふるさと秋田文学賞にかかわられたすべての方々に心からお礼を申し上げます。

第7回ふるさと秋田文学賞 随筆・紀行文の部

ふるさと秋田文学賞

蚕のなぐさめ

春野昌和・著

蚕のなぐさめ

この年（二〇二〇年）五月十一日に、皇后陛下雅子さまが初めて蚕の幼虫に桑の葉を差し与えられた、というニュースを私は耳にした。「御養蚕始の儀」として美智子上皇后さまのあとを引き継いでの歴代皇后の儀式という。

このニュースを聞いた時、私は直ぐに、皇后さまは、「まあ！」と心の内に感嘆のお声をあげられたのではないかと思った。夥おびただしい数で白く蠢うごめく幼虫に艶のある桑の葉を差しのべられて、えも言われぬ生命力の雰囲気おびただに圧倒されながら、驚きと好奇のお気持ちに満たされていたに違いない。

今から六十四年も昔になるけれど、私は高校生の時に蚕の幼虫たちに桑の葉を与えたことがあった。学校の実習でだった。それゆえ、ニュースを知って、初めて蚕たちに桑の葉を差しのべられた時の皇后さまの、儀式とは離れたお気持ちにも多少は思いをめぐらせることが出来るかな、と思った。

実習で蚕たちに桑を給餌する時には、普通の動物や生きものに餌を与える場合とは緊張感はまるで変わっていた。指で捻り潰せば形がなくなるほどの弱い虫ではあるけれど、農家の生計を支える宝の虫としての心のこもった扱いを先生から厳重に教え込まれていたからでもあった。

蚕はあの小さな体で、ポリポリと形容したらいいのかサワサワと言った方がいいのか、せわしくなく小さな音を立てて見る間に桑の葉を小気味よく食べつくす。食べて食べて、やがて糸を吐いて自分の糸の城の中に入ってしまふのだ。何と犯し難くて尊くて不思議な生きものであるか。私が学校の実習を通して蚕という虫に感じたことだった。

皇后さまの「御養蚕始の儀」のニュースを知って以来、記念登山の趣きになるけれど、予てより登頂しようと思いつつも半ばあきらめていたその山の登頂に再び挑戦することを決意した。その山頂には石仏が安置されているが、その石仏は養蚕にまつわる可能性が高いからである。

その山は湯沢市川連町かわつらまち地内ちないに聳える雌長子内岳めちやうしないだけ（四五三メートル）。雄物川の支流・皆瀬川の左岸近くに雄長子内岳おちやうしないだけ（四七〇メートル）と並んでいる。川の右岸沿いには川連の町が広がり、雌雄の長子内岳は町中からは手に取るほどに近い、いわば里山である。しかし、二つの山は共に急峻で山頂から谷まで大きなガレ場をむき出している。勿論、草木は生えず、雪も積もらない。冬は氷結して鉛色に光っている。それでも、雄の方は川連の町の方角からは三角錐の幾何学的な山容に見えることから三角山と呼称されて親しまれ、明瞭な登山道もあってよく登

られている。

雌長子内岳には一昔前はともかく、今は登山道が無いのだった。見た目には雌長子内岳よりは丸味を帯びているが、頂上近くに大きなガレ場があり、その辺から急に険しい傾斜になる。登る人はほとんど居ないようだ。それでも毎日目にする美しい里山として地元の人々に親しまれているようなのだ。

その登山道も無く今では誰も登ろうとしない雌長子内岳に「御養蚕始の儀」の数日前に八十二歳になった私は、頂上の石仏を見たくてとにかく登頂することにしたのだった。

私が養蚕を学んだ高校は横手盆地の東南部に位置し、東と南は里山に近い。東の奥羽山脈の山峡からは成瀬川なるせがわが流れてきて、南の宮城県境方面からの皆瀬川と高校の二キロほど南西地点で合流するのである。

私の住む横手盆地の中央部には六十四年前でも桑畑は見られなかった。高校の周辺地域さえ同じだった。学校用の桑畑が校舎の周りに広がっているばかりであった。

それでも養蚕科目を必修としていたのは、皆瀬や成瀬の川沿いの町や村から通う農家の生徒の家では主に副業として養蚕を営んでいる割合が多かったからであった。私にとって養蚕科目

は直ぐに役立つ勉強ではなかったが、寝泊まりして仲間と蚕の世話をするのが楽しくて、青春時代のよい思い出だと、今、思う。

稲川町史や増田町史によれば、皆瀬川流域と成瀬川流域の養蚕業は明治期から昭和初期にかけて隆盛をきわめ、秋田県内では最大の養蚕業地域だったらしい。在学中は自覚がなかったが、とにかく私の高校は秋田県一の蚕の飼育地を背景に建っていたのだった。そこで蚕という虫への憧れを抱くことになった。今では化繊に圧倒されて蚕を目にする機会は皆無になった。その反動で、野山でたまに山繭を見つけると小躍りしてしまうのだ。

養蚕や蚕のことを思う時、私には忘れられない女性がいた。高校時代の同窓生で、彼女とは卒業後一度きりしか会っていない。養蚕にも無関係なはずの女性だ。にも拘わらず、私の養蚕に対する思いに大きな影響をもたらしてくれたのだった。

三十年前だったと記憶しているが、高校の同窓会が開かれた際に、私はその同窓生の女性と卒業後三十四年ぶりで再会した。三十四年前のその女生徒とは学科が違っていたが、校内で偶然に出会うことがたびたびあって、よく挨拶を交わし合った。私は特別に彼女を意識していたので名前は勿論、皆瀬川流域方面から自転車通学をしていたので、遠くても川連の町あたり

に住んでいるのだらうと推測するほどだった。私の予測は当たっていた。

その彼女と気の遠くなるような年月を経て会ったのだが、孫の居る年齢の風貌にも拘わらず、ひと目で彼女だと判った。

彼女は川連町の東側の里山の麓近くで娘時代を送っていた。当然、皆瀬川を隔てた雄長子内岳と雌長子内岳を毎日眺めて過ごし、特に雄長子内岳を三角山と呼んで親しんでいた。しかし、今日まで登ることはなかった。急峻な山容のためだった。彼女と私は生まれ故郷の話を中心にした。現在の生活環境については彼女は話すことをためらっている様子だったので、私になるべく郷里の話に仕向けた。郷里の話は弾んだ。彼女と私の生まれ故郷は対照的だったからである。私は横手盆地の中央部で生まれ育ち、彼女は東西を里山で囲んだ川連で生まれ育った。私は夕陽が出羽丘陵の地平線のような山の端に沈むのを見られても、彼女はそのような荘厳な光景を見ることは出来なかった。また、私は家の外に出れば鳥海山を眺めることも出来たが、彼女には望むべきもなく、川連の町から北西や北の方角に四キロほど移動すればすぐ眺められるのだが、私のように家の周りから眺めたいと願望していた。それは不可能な望みだったという思いが閃いた。東の国見岳が西の雄や雌の長子内岳よりも標高がかなり高いことを知った

からであった。そして、高校一年の時に父親にせがんで一緒に登ったのだった。

そのときの国見岳山頂からの鳥海山の眺めは今も印象にあるが、それ以上に毎日目にしている雌雄の長子内岳は勿論、雌長子内岳の陰になって川連の町並みからは姿が見えなかった三本槍山（四九八メートル）の全貌をはっきりと認めたことが嬉しかったのだった。この時以来、彼女は雌雄の長子内岳と三本槍山を三兄妹と呼ぶようになった。一番標高の高い三本槍山が長兄で妹が雌長子内岳であった。

三本槍山のことは彼女から教えられて初めて知ったのだった。のちに、この山に登り頂上で二体の石仏を見つけて、さらに私の養蚕に向ける思いが高まったようだ。

いずれにせよ、彼女と私の生まれ育った土地の地形環境が違っていたので宗教に関しても宗派とか信仰の対象仏が異なるもののようにだと私は彼女と話をしていると感じていた。私が鳥海山の北と南に沈む夕陽を四季の中で眺めて感動したことを言うと、彼女は私のことを阿弥陀仏志向だと言った。そして、彼女の実家では代々、大日如来を拝んできていたのだった。彼女自身も大日如来志向だった。日の出も夕焼けも鳥海山も眺められない。眺めるとすれば山の高みに登るしか手段がないのだった。そのことが、彼女が山の高みや山の彼方や空の果てなどへの憧れへと導かれたのであり、天空を回る太陽の大日如来の志向に繋がったのであった。

私は高校の同窓会で彼女の言う「大日如来」の仏様の名前をその時は世間話の流れの一つとして聞いていたと思う。四年前に三本槍山に登頂して大日如来の石仏を目にし、やっと思い出したのだった。彼女との再会後も大日如来の仏名を耳にすることはあったが、そんなことを話していたのか、と改めて驚くほど、私にとって三本槍山に登ったことは大きな出来事であり、心の支えのようなものになった。

三本槍山への登頂を果たしたのは二〇一八年四月三十日。私は認知症予防だとか足腰の鍛錬のために数年前からウォーキングをしていたが、その延長として三百メートルほどの里山も歩いていた。そんな日常のある日、同窓生の彼女の夢を見た。再会した時は生まれ育った里の山の話が多くしたが、夢では何か二人で町で買物をしている様子だった。夢とは不思議なものだが、それ以上に夢に催促されたように三本槍山に登ることになった。夢は山とは全く脈絡がなかったのに。その時の心境は七十九歳になる前に一丁三本槍山に挑戦してみるか、という空元気だった。しかし、そんな前向きな気持でないと不明瞭な登山道を八十歳近い老体が一人では登れないと思った。

地形図には登山道は載っておらず、湯沢市の登山愛好者から情報を得ることにした。今はそ

の山はほとんど登られていないので道は無いに等しいのだった。ガレ場が随処にあるので気を付けることだった。ガレ場が多いのは流紋岩地層だからで、雌雄長子内岳と三本槍山の地層は流紋岩地帯だと言う。五百メートルにも満たない里山では珍しい景観らしかった。

道は案の定、人の歩いた気配はなかったが、迷わずに頂上近くまで登れた。難儀したのは頂上近くの藪こぎだった。二キロの道程に五時間を費やして頂上に立った。頂上は三疊ほどの平地で低木に囲まれていたが眺望は素晴らしく、川連や稲庭の町は色彩豊かに広がり、栗駒山や焼石連峰は淡い新緑の里山の上でまだ白一色の姿を見せていた。

頂上に立った直後には気付かなかつたが、半ば土に埋もれたようになって三十センチほどの二体の石仏が東の川連方面を向いて安置されていた。通常だと山の頂には神社の奥宮や祠ほじらが祀られているのだが、仏様が安置されているのは私には珍しくて、道なき道を難儀して登ってきたし、下山の無事を願って合掌をしようとして石仏を注視した。

私は思わず、おや！ と声を発するほどだった。

向かって左の石仏は智拳印を結んでいではないか。

この仏様は大日如来なのだ。右の仏様は脇侍わきじの聖観音しょうくわんのんに違いない。

私は釘付けになって大日如来に対面していた。同窓生の彼女の面影が胸に広がっていた。彼

女の実家が代々、大日如来を祀っていたこと。彼女自身も大日如来志向であること……。急に蘇ってきた彼女の言葉を思いながら、聖観音の背後の石碑を確かめた。刻字が半分、土に隠れていたので石碑を持ち上げて読んだ。

天照大神蚕宮 文久三亥三月十五日

私はおや、と思った。石仏の表は大日如来で石碑は天照大神。この石仏は江戸時代後期の神仏混淆期のもものだから、私の無知識であえて推量するのだが、大日如来と天照大神は同一神に違いない。〃蚕〃は養蚕のことであろう。稲川町史によれば〃秋田藩の養蚕業は文政八年（一八二五年）に川連村の関喜内せきないが普及を図った〃とあるので、関喜内の郷里と言える山域のその山頂に〃蚕〃の石碑があることは天照大神の〃蚕〃は大日如来の蚕で、大日如来は養蚕に関わりがあるに違いない。〃宮〃は神宮のことだろうか。神のおわす宮。天照大神の祀られている神宮。多分、伊勢神宮のことであろう。伊勢神宮に繭か生糸を献上した記念碑だろうか。それとも、神に養蚕の繁栄を祈願する祀りであろうか。

私は同窓生の彼女を思い続けていた。彼女の実家は代々、大日如来を祀ってきていたのだから

ら、多分、彼女の祖父か曾祖父の代に養蚕を営んでいたことも想像出来るのであった。そして、彼女の実家の大日如来に関わることで思ったのは、彼女自身は実家の養蚕を勿論目にしたことは無いにしても、彼女は自分を大日如来志向だと言ったことに、私は実家との見えない蚕の糸で大日如来は結ばれているように思えてならないのだった。

私が高校時代に彼女に魅せられたのは、私と顔を合わせると明るい笑顔で挨拶してくれることであつた。あの前向きともとれる明るさは大日如来志向の表情ではなかつただろうか。

三本槍山からは雌長子内岳のガレ場の北面と雌長子内岳の壮絶な西面のガレ場が手に取るように見渡せた。ただ、雌長子内岳の頂上だけはぼんぼりに似て親しみを覚えた。今度は雌長子内岳に登る決意をした。頂上には同じように石仏が安置されていることを知つたからである。

雌長子内登山は三本槍山登頂の翌年の四月、雪が消えて樹々の枝葉がまだ繁茂しないうちに実行しようと思つた。道が無いのを地元の人に聞いて知つていたからで、藪こぎを覚悟しなければならなかつた。ただただ山頂の石仏を見たかつた。三本槍山の山頂の石仏と同じように、多分、養蚕に関わる石仏ではないかと期待を抱いた。はやる気持ちを抑えながら下調べのために麓へ向かつた。雌長子内岳の裾になる丘状の山域は杉の伐採のためのブルドーザ道が複雑に

開削されていて、登り口を探すすべはなかった。それでも、四月二五日に登頂に挑戦する計画だったので、とにかく適当な入山地点を選んで山中へ入った。五十メートルほど藪をこいだ。五十メートル進むのに三十分ほどの時間を費やしてしまった。私はこれ以上登り続けるには八十一歳の年齢からして体力的に無理だと判断した。この時の無茶な行動が祟ったのか、私は体調を崩してしまった。床には臥さなかったが、食欲は全くなかった。急峻で、しかも道のない藪山を踏破するのはこの年齢では無理だと私は悟らざるを得なかった。誰一人登ることのない山の厳しい現実を認めなければならなかった。

しかし、私は健康のためのウォーキングは続けていた。新型コロナウイルス感染騒ぎをよそに、マスクを付けながら田んぼ道を歩き続けていた。

「御養蚕始の儀」のニュースを耳にしたのはウォーキングから帰った夕方だった。皇后さまが蚕たちに桑の葉を差し与えられる光景を想像して私は若返った気持ちを抱いた。はるか昔の高校時代に蚕たちに桑の葉を与えた時のときめき。楽しかった実習。魅惑的な笑顔で私に声をかけてくれた女生徒。そして、人妻となって不思議な憂いを漂わせながら「大日如来」を口にしたその彼女。

私は万難を排して再び雌長子内岳の登頂を目指す決意をしたのだった。三本槍山頂上で味わ

った感動を再び味わうために。

雌長子内岳の登頂を目指したのは、今年（二〇二〇年）六月三日だった。

麓のリング畑に通じる林道で、リングの摘果作業に向かう男性に出会った。山中に神社があり、神社へ行ったらいよいよ、と男性は教えてくれた。私は神社が山中にあることは地形図で調べて知っていたが、神社へは道が通っていることまでは気付かなかった。なるほど、と納得しながら、まずは登頂達成祈願の参拝だな、と考え直すと気持ちが悪くなった。

神社は三メートルほどの高さのコンクリート造りで山神社の名前だった。参拝したのち、神社の脇に踏跡らしいものを見つけてそのまま歩いて行った。道跡らしい部分は消えてしまっただが構わずにそのまま進むと、背丈を超える雑木林に入った。それから先は悪戦苦闘の藪こぎを三時間ほど続けただろうか。赤松の大木の根元で長い休息をとった。頂上に向かって左手に迫る隣の雌長子内岳の頂上が手に取る近さで望まれた。雌雄の長子内岳はほぼ同じ位の標高なので、こちらの頂上は見えなくても雌長子内岳の高さ具合で、雌長子内岳の頂上はもうすぐだと判る。

私は登頂の確信を抱いた。だが、この上から急峻な登りとなる上に大きなガレ場が待ち構えているのだ。しかし、私は老体に鞭打って齒を食いしばって藪を進んだ。ガレ場の縁を雑木

に掴まりながら恐る恐る登り終えた。樹木の絡まる足元を見ると、一本の明瞭な落葉の筋が上にのびていた。古い踏跡に散り敷いた現象で、けもの道とははつきりと異なる古い登山道だった。

雑木のトンネルから低木帯に変わると、やがて草地となった。頂上だった。私は疲れを忘れて石仏を探した。背丈を超える雑木の壁に囲まれた四畳ほどの草地の隅に三十センチほどの石仏が一体安置されていて、石仏の前に酒のワンカップが供えられていた。地元の酒造会社のラベルがまだ新しかった。

石仏は地藏菩薩。

背後の石碑には文久二年、と刻字され、さらに他にも刻字があつたが判読出来なかつた。

私はまだ新しいラベルのワンカップを見て驚いた。やはり、どんなに道がなくても、昔歩いた歴史がある限り、そして、合掌すべき対象がある限り、万難を排して訪れる人は居るものだということに。このワンカップをお供えした人は地藏菩薩の置かれた真の動機を知つた上で登拝したのであろうか。その当時の記録の文献が遺っていれば判ることではあろうが、この人は亡くなった人の供養で登拝したものと思いたい。地藏菩薩を一目見てそんな予感を持ったからである。三本槍山の石仏安置は文久三年でこちらは文久二年。ほぼ同時期の安置で二件の間に

は何かの脈絡がある気がするのだ。すなわち、二件とも同一人物による発願の安置ではなからうか。何かの事故で落命した大切な人の霊を弔い、喪が明けた翌年旧暦三月、雪消えと共に地藏菩薩を安置した山と仲間の三本槍山に感謝と復活の祈願を大日如来に献げた。大日如来を山上に祀ることを発願した人は、川連の里で蚕を飼う人であろうか。

養蚕は多忙で重労働である。亡くなった人は男性だろう。川連の里で蚕を飼う人は女人に違いない。その女人は、亡き人を偲びながら、生命力の旺盛な蚕たちに桑を差し与えて蚕たちから慰撫と生きる力を貰っていたことだろう。

山・山頂のロマンの香りに誘われて

春野 昌和

私は若い時から気が向いた際に山登りはしておりましたが、稲作農業を辞めた老年になって運動不足を感じ、ウォーキングや軽登山を日課として続けておりました。八十歳を過ぎてから道の無い急峻な蘆山の頂上を、無謀を承知で目指せたのもそのお陰かな、と思っております。まさか、この老いぼれの体験記が、「県民読書の日」制定記念と銘打った賞に入選するとは夢にも思っておりませんでした。身に余る光栄と感謝しております。

山頂を目指して悪戦苦闘していた時に、道案内人の如く心の支えになっていた「言葉」と「本」が脳裏にありました。

ゴリラ研究で著名な山極壽一さんの「コロナ禍でも好奇心を抱き続けることが幸せの感じ方が深い」と述べられていたことで



す。

また、山岳文学の白眉ということであつた新田次郎著『劔岳（点の記）』（文春文庫、二〇〇六年）です。ご存知のように、明治時代の測量隊が登頂困難な劔岳の初登頂を目指し、悪戦苦闘の登頂の果てに三角点を設置はしたのです。けれど、山頂には平安時代の仏具があつた……。はるか平安時代に劔岳に登頂した人物がいた。作者はそれら事実を小説化するために、老いた身で日本で最も登頂が難関とされる劔岳に実際に登頂して検証したのでした。しかし、平安時代の人物は謎のまま、小説は終わります。

私はこの本から、山・山頂に横たわるロマンの香りを胸に吸い込んだ想いでした。

そして、私は石仏を確認した二カ月半後、奇遇にも秋田県在住の探検家・高橋大輔さん著『劔岳―線の記 平安時代の初登頂ミステリーに挑む』（朝日新聞出版、二〇二〇年）を手に入れました。新田次郎のあとを受けて、平安時代の劔岳登頂者を解明したのでした。高橋さんは検証のために四回も劔岳に登頂したとのこと。

里山を含めた山・山頂には未知のロマンが多く眠っているでしょう。特に里山は荒廃し、熊の出没が頻繁です。藪山になると人間ドラマであつた形跡は、愈、知られざる歴史ロマンとして埋もれていくのかと思うと残念です。

第7回ふるさと秋田文学賞 随筆・紀行文の部

ふるさと秋田文学賞佳作

消えゆく集落の記

鹿住敏子・著

消えゆく集落の記

山笑う

子どもの頃、春の訪れをいち早く知るのは、意外にも雪の変化だった。二月の初め、暦の上では立春。けれども、雪国の秋田では寒さが最も厳しい時だ。

そんな朝、学校へ向かう子供たちの歓声がおこる。

「わーい、かた雪だ。かた雪だ！」

澄み切った青空のもと、雪面はキラキラと輝いている。どこを歩いても、子どもの体重ではびくともしない。日中、少しずつ強くなった日差しで溶けかかった雪が、夜間の寒さでカチカチに凍っている。

踏み俵で、道をつけてもらいながら通った一本道。そんな道には関係なく、田んぼの上も、畑の上もどこでも歩いていける。

雪をこぎながら通っていた四キロの道のりも、かた雪の朝は最短で行ける。田んぼを突っ切って、まっすぐに駆けていく。

雪面は凍ってはいいても、スケートリンクのように滑るわけではない。

赤々と燃えている教室の薪ストーブの周りにも、一番乗りだ。

一月、目も開けられない吹雪の朝。途中で泣きべそをかい、歩みを止めてしまう一年生を

なだめながら、学校までやっとたどり着いていた。かた雪の後には、そんな吹雪の日はもう来ないことも、子どもたちは身をもって知っていた。

かた雪の朝が数日続いた後には、日差しも一段と強まる。

雪解けは、日当たりの良い畦道から進んでいく。

田んぼのくろくに、真っ先に芽を出すのは「ばっけ」だ。あちらこちらに、まだ雪の残る中、真ん丸な頭をのぞかせる。鮮やかな萌黄色の茎が日ごとに伸びていき、辺りを春らしい景色に変えていく。

ばっけの後には、つぎつぎと春の花や山菜が顔を出す。

つくし、ヒロッコ、山セリ、水仙、スミレ、ニンソウ……。

誰も知らない場所に、ひっそりと咲くニンソウを眺めながら、しみじみと春の訪れをかみしめた。

つくし、ヒロッコ、山セリは、採って帰ると家族が喜んで食べてくれた。それが嬉しくて、幼なじみや弟たちと、ヒロッコを掘りに行った。誰に頼まれたわけでもない。山菜採りが、楽しい遊びの一つだったのだ。

まだ、雪の残る畑に、ちょこんと黄緑の芽が出ている。周りを少しずつ掘っていくと、土の

下には、淡い黄色の茎が長く伸びている。根は細長い球根のように丸くなっている。それを、根っこごと掘り起こす。土の中から出てきたヒロッコは、十センチ近くもある。

持ってきた袋を一杯にすると、畑を引き上げる。

帰り道には川がある。川岸にはまだ雪が残る、流れの緩やかな川だ。その川の浅瀬で、ヒロッコの泥を洗う。子どもの長靴の半分くらいの高さの浅瀬を、河原の大きな石でせき止める。

そして、上流のほうから泥付きのヒロッコを流す。すると、せき止めた石の所まで流れてくる間に、ヒロッコの泥は落ちて、きれいな白い根になっている。

川のほとりには、ネコヤナギの木がある。灰色の猫のしっぽのようなモコモコとしたつぼみだ。ヒロッコ掘りと川とネコヤナギは、記憶の中では、一枚の写真の景色のようにワンセットになっている。

そうやって、きれいにしたヒロッコを持って、得意満面で家に帰る。それを、母が、おいしい味噌かやきしてくれる。

冬の間は、干した大根の葉や、塩漬けの山菜などが多かったので、掘りたての旬のヒロッコは、香りも味も格別だ。

冬の間も、屋根の雪下ろしや雪除けなどで、休む間もない大人達。雪解けとともに春の農作業に入る。

田んぼや畑は耕運機で耕される。耕運機をかけた後は、鍬で耕していく。畑に植える作物も、それぞれに適した時期があるようだ。早すぎても、遅霜が降りたりするとだめになってしまう。今のような、詳細な天気予報を伝えてもらえないわけでもない中、自然のいろいろな現象と、経験によつて鍛えられた勘を頼りにしていたのだろう。

畑の作物が食べられるようになるまでは、豊富な山菜が食卓を潤してくれる。

「カッコウ」が鳴き始めるころには、畑の周りに笹筍が出てくる。鉛筆くらいの太さの筍だが、やわらかくてとてもおいしい。家族みんなで採ってきた筍で、鍋いっぱい味噌汁を作ってもらう。子どもたちはみんなこの味噌汁が大好きで、競い合うようにして食べた。

筍の終わるころには、ワラビやゼンマイが採れる。農作業で忙しい大人たちに代わって、子どもだけで採ってくることも多かった。

たくさんワラビを採って家に帰ると、祖母が、庭で大きなつば釜にお湯を沸かして待っている。灰を入れた釜に、採ってきたワラビを入れてあく抜きをする。くすんだ深緑色だったワラビが、あざやかな青緑色になる。あく抜きしたワラビを叩いてすり鉢でする。それに、味噌

を入れて山椒を入れてできあがるのは「ワラビたたき」だ。これをご飯にかけてと何杯でも食べられる。

たくさん採ってきたワラビは、冬に備えて塩漬けにしておく。春になって間もないころから、冬の準備が始まるのだ。

山の谷間に細長く雪を残しながら、山桜や真っ白なこぶしの花が咲き、山笑う。

山やま滴したる

山には青葉が茂り、田んぼには水が張られ始める。そして、農繁期に入る。

田植えは、四軒の集落全員が力を合わせて行う。集落の全員で、一軒ずつ終わらせていくのだ。まだ、田植え機などない時代だ。子ども達にも大切な役割がある。

大人達が、一把ずつ束ねた苗を左手に持ち、右手でそこから三、四本ずつ取り分けながら植えていく。左手の苗がなくなったときには、腰を上げて畦道にいる子ども達に合図をする。すると、その人を目掛けて、新しい苗の束を、ポーンと投げるのだ。これが、なかなか難しい。手

元にしつかり届かないときは、ぬかる田んぼを歩きながら、植える人が取りにいかなければならぬ。この苗の投げ方が、田植えの効率にも影響する。

子どもも大人も集落全員で、力を合わせる。終わった後には、子ども心にも、ひと仕事をやり終えた達成感があった。

そうやって、集落四軒の田植えが無事に終わるころには、我が家の畑の端にある、八重桜が満開になる。一本だけの、とても大きなサトザクラだ。

その下で、集落のみんなが集まって、花見をしながらの早苗饗がおこなわれる。無事に田植えが終わったことのお祝いだ。それぞれの家からお重箱にいっぱいのごちそうが持ち寄せられる。大人たちはお酒を飲みながら……。子ども達は、みんなが兄弟のように、桜の木の下で、大きな子が幼い子の面倒をみながら楽しく過ごす。

子どもたちはみんな小学生以下で、大人たちも若かった。
今、振り返ると、このころの集落が一番活気にあふれていた。

学校までの四キロ程の道のりは、子どもの足では一時間もかかる。けれども、その途中には、四季おりおりの楽しみがあった。

田んぼの苗も大きくなり、用水路にはたつぷりの水が流れている。

そんな朝、ヨシの葉の上で、羽化しかかっているオニヤンマがいる。ヤゴの背中が割れて、フワフワの羽と体の半分が出かかっている。色もまだ淡い黄色と黒だ。それを、草ごとそっと折って学校まで持っていく。

風の当たらない窓の下に置いて、休み時間ごとに覗きに行く。

二時間目が終わるころには、体の全体が出ている。羽も体もまだ濡れているようで柔らかさうだ。それでも、羽をピンと伸ばして、飛び立つ時を待っているようだ。黒と黄色の縞の体の色も、だいぶ濃くなっている。

昼休みには、無事に飛びだっていったらしく、ヤゴの抜け殻が付いたままのヨシだけが残っている。

オニヤンマの羽化が見られる頃には、夏休みも近い。

先生達は各部落の川を周って、夏休みの間、遊泳してもよい場所に、赤い旗で印を付けていく。

普段は、四軒の集落の子どもだけで遊ぶことが多いが、夏休みの川だけは違う。反対の川岸

の子ども達も、同じ川で遊ぶのだ。道路を周って行けば四キロ近くもある集落だが、同じ川に両岸から集まることができる。

それぞれの集落では、当番の保護者が、毎朝、川の様子を見に行く。泳いでも良い日は白い旗、泳いではいけない日は赤い旗を、みんなの家から見えるように、屋根よりも高く掲げる。

白い旗の日は、子ども達が一か所に集まってから川へと向かう。遊泳できる場所へ行くまでに、浅瀬を横切らなくてはならない。浅瀬といっても流れは速く、低学年の子ども達と手をつなぎながら、慎重に渡る。そこからは、大きな石のゴロゴロとした河原を歩く。水晶のようなキラキラとした石を見つけた時は、大切に家に持って帰る。

遊泳しても良い場所では、高学年の子ども達も、低学年の子ども達への目配りをしながら楽しむ。

川岸の岩の窪みには、日光で温められた水が溜まっていた。冷たくなった体を、そこに座って温める。自然の恵みは本当に優しかった。子ども達は、それを上手に生かす知恵を持っていた。

たつぷりと川遊びをして家に帰ると、畑から採れたおいしいおやつが用意されている。トウモロコシ、スイカ、マクワウリ、キュウリやトマトもおいしいおやつになった。

スイカやトウモロコシを畑に採りに行くのも、子ども達の楽しいお手伝いだった。

「蔓っこ踏むなよ」と母が大きな声をかける。スイカの蔓を踏んでしまうと、スイカが育たなくなってしまうのだそう。ゴロンゴロンとなっていて大きなスイカの中から選ぶ。大人達の真似をしてポンポンと叩いたりもする。音の違いもわからないのに……。

「これにするが?」「あっちの方がええんでねが?」なんて迷いながらも、一つもぎ取ってくる。子どもの手では、やっと持てるくらいにスイカをそのまま井戸に冷やしに行く。スイカをドボンと井戸に入れる。入れた瞬間は下の方に沈んでいくが、すぐに、プカッと浮いてくる。こんな重たいスイカが、どうして水に浮いてくるのか、子どもの頃は不思議だった。

二時間も冷やしてから取りに行く。切った瞬間、パーンと割れて真っ赤な時は歓声が上が。スイカが赤いのは当たり前のことだが、熟す前の薄いピンクの時もあるからだ。そんな時は、キュウリより少し甘いだけのスイカを黙々と食べる。

「あと三日だったな……」なんて言いながら……。

短い北国の夏は、お盆を過ぎる頃には、朝夕、めっきり涼しくなり、秋の気配がしのびよる。

山粧やまよそぢう

すすきの穂が揺れて、田んぼも山々の木々も色づく。

学校帰りには、ランドセルを道の端に置いて、山に入って道草をすることもしばしばだ。栗拾いをしたり、紫色のぱっくりと口の開いたアケビを採ったり……。子ども達にとっても実りの秋だ。

大人たちは、稲刈りから脱穀まで大忙しの毎日が続く。

今のように、機械で稲刈りと同時に脱穀までできるわけではない。

刈り取った稲を、天日干しできるように、稲架を組み立てる作業から始まる。鎌で刈り取った稲を、一把ずつ束ねる。束ねた稲を稲架まで運んで、きれいに干していく。晴天の続く日を選びながら……。

脱穀機は集落に一台しかなかったので、自分の家に機械が回ってきたときには、家族総出で脱穀作業をする。

稲架から降ろしてきた稲を、次々と脱穀していく。日が暮れても、小屋に電球を灯して作業は続く。脱穀された藁は、小屋の外に積み上げられる。子ども達は、ふかふかの布団のような藁に潜って遊ぶ。

今でも、秋の夕暮れになると、あの時の藁で遊んだ日々がよみがえる。脱穀したての藁の香りとともに……。

田んぼの仕事が一段落しても、冬支度は続く。畑の大根は全部抜かれて、干し大根にしたり、漬物にしたり……。大根の葉も干されて、冬の間の大事な野菜となる。

漬物の種類もおびただしい。沢庵漬け、鉈割り漬け、水漬け、茄子の蒸かし漬け、キュウリの味噌漬けまで作る。夏の間は漬けた、夕顔や山菜の塩漬けなどもあり、小屋は漬物の樽でいっぱいになる。

そうして、木の葉がすっかり落ちてしまう頃には、冬の支度はあらかた終わる。あとは、雪が降る直前の雪囲いを残すだけとなる。

山眠る

すっかり寒々しくなった木々に初雪が降る。それは間もなく根雪になり、本格的な冬の到来だ。四軒だけの集落にとっては、なおさらに厳しい冬だ。

どれだけ雪が積もっても、除雪車はバスの走る道路までしかこない。その道路までの二キロ

ちよつとが、とても厳しい。

目をさますと、部屋が暗くなってしまうほど、窓にまで雪が張り付いている吹雪の朝。子ども達の登校も難儀だ。

一面に真っ白になった雪の中を、踏み俵で母が踏み跡をつけてくれる。そのあとを、脚絆をつけた子供たちが続く。一步一步踏みしめながら……。吹雪の日は、ほんの数メートル先さえ見えない。

少し大きな集落の入り口にある、大きな一本杉。そこまでたどり着くと、人が歩けるくらいの道がある。母は、そこで家に帰り、子ども達は脚絆を脱いで、一本杉の根元に置く。帰りは、また、ここから脚絆をつけて帰るのだ。

集落の境目にある大きな一本杉。行きも帰りも子ども達を見守ってくれていた。

今でも忘れられない冬の光景がある。雪の多いお正月のことだった。四歳違いの弟が、三歳になったばかりのときだったろうか……。

いつも以上に大にぎわいで、お正月のごちそうを食べた夜。祖父に抱かれていた弟が、いきなり、白目をむいてピーンと硬直して伸びてしまった。大きなひきつけを起こしてしまったの

だ。すぐには戻らない。今は、やめた方がよいといわれているが、舌を噛まないようにと、口の中に割り箸をはさんで脱脂綿を噛ませたり、大人たちの動きから、ただ事ではない様子が伝ってくる。

雪が深い真冬の夜。お医者さんの往診など、望むべくもない。

翌朝、深い雪の中を、父が、腿までもある雪をこいで先を歩き、弟を背負った母が続く。五キロほど離れた、かかりつけの医師のところへ連れて行くためだ。

その後ろ姿が見えなくなるまで、窓から眺めていたのだろう。母が弟を背負った背中の、黄土色の角巻が今でも目に焼き付いている。

四軒だけでも、力を合わせて生きてきた集落が、今、消えつつあるのは、この、冬の厳しさが、大きな理由の一つであることは間違いない。

五キロ程離れた中学校へは、雪のない間は自転車通学ができた。

けれども、冬の間は、除雪車が通らない二キロ余りの道は、手さげ鞆を紐で背負って、雪をこぎながら帰る。吹き溜まりに腿までぬかると、なかなか足が抜けない。毎日が、ラッセルだ。中学までは、そうして何とか通えても、秋田市内に列車通学が始まる高校生になると、それはできなくなる。朝早い列車に乗るために、雪をこいでは通えない。帰りはもつと無理だ。

四時過ぎには暗くなってしまう雪道を、道もない中、家まで帰ることはできない。

そうした理由から、高校生になると、秋田市内で下宿生活を始める。そして、集落からも離れることになる。

四軒のうちの、二軒の息子さんは集落の家を継いだ。けれども、自家用車で通勤するため、除雪車が通る大きな集落へと、家ごと引越していった。我が家を含む残りの二軒の子ども達は、大学や就職でそれぞれに県外で暮らすことになった。

近年は、高速道路もできて随分と便利にはなったが、改めてこの集落で生活しなおすことは難しかった。

集落ができて六十年余り。その集落が今、静かに消えつつある。

昨年暮れに、弟が帰省して雪囲いをしてきたが、この春は、新型コロナウイルスの影響で帰ることができない。カッコウが鳴くころになっても、主のいない家はまだ、雪囲いのままだろう……。

池の鯉たちは元気だろうか？

幼かった息子は、おじいちゃんと一緒に、鯉に餌をあげるのが大好きだった。パクパクと大

きな口を開けて、寄ってくる鯉たちに驚きながら……。

今は、二人ともいない。遠い日々……。

三月、全国に緊急事態宣言が発令された時に、佐竹知事のことばがニュースで流れた。

「秋田の郡部の方では、普段から人があまりいないので、ピンとこない人もいるかもしれませんが……」

まさしくそんな集落だった。その暮らしが、今になってかけがえのないものに思えるのは、こんな時代だから、なおさらなのかもしれない。そこで暮らすことができたのは、労を惜しまない大人たちの、並々ならぬ覚悟があったからだ、今さらながらに気が付く。

一年中、食卓を彩ってくれていた母の「がっこ」。せめて、そのいくつかでも教わっておけばよかった。残念な娘だ……。

消えゆく集落の記

母

鹿住敏子

三年前、初めてこの賞をいただいた。授賞式は横手で行われた。

一人暮らしの母のもとへ、暗くならないうちに一刻も早く駆け付けたくて、式が終わるや否や会場を後にした。自分の都合で帰るのにもかかわらず、スタッフの方は、横手駅まで車で送ってくださった。本当にお世話になりました。

晴れの舞台から帰ってきた娘の姿を見るや、母の顔はパツと輝いた。我が子を亡くした後の娘が、こんなふうにな立ち直りつつあることに、少しでも安堵してくれたのかもしれない。

翌朝、母よりも早く起きて朝食の用意をした。起きてきた母は

「あやあ、まあ、ありがとう……」とまるで、高級旅館の朝食でも並んでいるかのような喜びようだ。味噌汁とご飯、焼



き魚と野菜のお浸しの、簡単な物だったのに……。

誰かに作ってもらったご飯を、誰かと一緒に食べるといことが、それほど嬉しかったのだろう。裏を返せば、普段のたつた一人だけの食卓は、どんなにか味気なかったことだろう。

数日前、地元で暮らしている中学時代の友人から、メールが届いた。赤いケイトウの花の写真添付で……。それは、私の母が育てていた花の種で咲かせたものだという。

嬉しい驚きだった。

確かにこの花は、居間の出窓の下の花壇に咲いていた。懐かしくて何度も眺めているうちに、もつと深い記憶が蘇ってきた。

だいぶ以前に数年間、母の日には、いく種類かの花の小さな鉢を、大きな籠にアレンジして送っていた。お盆に帰省すると、一つ一つが大きな鉢に植え替えられたり、地植えにされたりして見事に育っていた。子犬の尻尾のようなこのケイトウ、赤と黄色の小さな苗も、確かに送った記憶がある。

あの小さな花を大切に育て、毎年、秋には種をとり、長い年月、咲かせ続けてくれたのだから。

「丁寧に生きるって、こういうことなんだね、かあさん」

あの家に、今、母の姿はない。

あの頃の集落の暮らしを、このようなかたちで残せること、心から嬉しく思います。ありがとうございます。

選
評



©三宅史郎

「削ること」を考える

内館 牧子

年々レベルが上がっていることが、選考委員の間で話題になる。

そんな状況もあってのことか、「最終選考に残す作品数を、もう少し減らしてもいいのではないか」という意見も出た。

今回、「小説の部」には77作品の応募があった。その中から、最終選考には7作品が残っている。11分の1の狭き門をくぐったことになる。「随筆・紀行文の部」では、55作品の中から4作品が残された。こちらも13倍以上になる。

最終選考に残す本数を減らせば、さらに厳しくなるが、よりレベルの高いものが選りすぐられることになる。これは応募者にとっても、また本文学賞にとっても意味のあることかもしれない。一考の余地はありそうだ。

〈小説の部〉

多くの場合、選考する上で、委員の意見は非常に割れる。ところが、今回は珍しく、全員が「赦し」に高い点をつけ、他作品に差がついた。

私は心理描写がとてまいと思った。三十代を折り返した主人公の、心のひだが細やかに描かれている。それも自虐を含んだユーモアで処理するあたりもリアルだ。

「卑怯な人だった。言葉に出さず、態度に出した」等々、ズンとくる描写が際立つ。

佳作の「近かったり遠かったりするもの」は、大きなテーマを含んでいる。それは「結婚って幸せかねえ……」ということ。私にはそう感じられた。面白い。

構成がうまく、何よりも回想の入れ方がいい。回想シーンは下手に入れると、物語の勢いを削ぐ。青山作品は、過去にも最終選考に残っているが、すんでのところで佳作になる。何が足りないのかを、じっくり考える時だと思う。

また「生きていれば、どうにかなることも」と「十七年目のババヘアアイス」「ひとり祭り」は選考委員の評点に非常に差があった。学校の成績表に例えるなら、5と1がある。個性でもあり、武器にもなりうる。それをどう伸ばすか。また「異界の人」「八月の恩返し」共々、11倍を突破したのになぜ佳作まで行けなかったのか。共に、今後の課題として考えてほしい。

〈随筆・紀行文の部〉

私は制限枚数を、10枚程度にしてもいいのではないかと思う。現行の半分ほどだ。

400字詰で20枚の随筆、紀行文というものは、決して楽ではない。20枚かそれに近い枚数を稼ぐためにどうしても余分なことを書く。ふくらませる。その場合、状況説明や論文のように原典の引用をしたりが目立つ。

それが必要な場合もある。しかし、枚数稼ぎの苦肉の策という思いが見え隠れする作品も少なくはない。随筆、紀行文の場合、この不要な部分で読み手はあきる。ダレる。

もし、20枚を書くなら、30枚書いて10枚削ってみる。その削る作業はとても大切だ。「稼ぐ」と「削る」の違いは明確に作品に出る。

私は、本文学賞の場合、10枚から限度15枚と考える。選考会では同様の意見も出た。やはり一考の余地はあるのではないか。

「蚕のなぐさめ」は、他作品に2ポイント以上の差をつけ、問題なく文学賞に推された。

生命力の旺盛な蚕と、人間を寄せつけないような孤高の雌雄長子内岳、三本鎗山。その組み合わせをみごとに描いている。そして、高校時代に想い続けた女学生に触れた。この女学生と
のことが過不足なく、非常にいい分量で入っている。

佳作の「消えゆく集落の記」には、筆者の思いや心理がよく表現されている。その季節の描写をしているように思えるが、行間に筆者の心理が読める。そのため、単なる状況説明文になっていない。「山笑う」「山滴る」など季語で表現した小見出しにも、故郷への思いの深さを感ずる。

「おもかげ」はもう一工夫で上位につけただろう。構成がまずかった。どう構築すれば、よりよくなるかを計算し、来年を目指してほしい。「台の洋館の宣教師」もうまい。ただ、やや小論文に片寄りつつあり、残念だった。もっと書き手個人の思いや、心理を描いて次回も応募してほしい。

〈脚本家 秋田市出身〉



無駄を省く努力

塩野米松

文学賞も7回目となると応募されてくる作品の質が格段に上がってきた。何度も挑戦してくださる方も多い。そうした方たちが力を込めた作品を応募してくださいませいもあるだろう。また傾向と対策を練って挑んでくださる方もいるのだろう。こうして応募作品が互いに磨き合って質を向上させていくのかも知れない。間違いなく、底はぐんと上がって選考委員を悩ませている。ただ、ずば抜けた「これぞ！」という作品がまだ出てこない。

今回の応募作品は総数は昨年と同じ132点。選考の過程を述べると次のようになる。まずは事務局により予備選考が行われる。次いで作家の柴山芳隆氏によって第1次選考が行われ、私たち最終選考委員3人に届けられる。最後まで残った作品は小説部門が7点、随筆・紀行文が4点。私たち3人はそれぞれ読み、評価をして最終会議に臨む。

私は初めて読むとき、上手な表現、疑問のある書き方、資料を生のママ使ったある箇所（こなされていない説明文になることが多い）、展開（突然すぎる変換になっていないか）、キャラクターの設定とその表現、作者の視点、意図、文体が持つ特性などに気をつけている。気になるところにはラインを引き、付箋を貼り、感想を書き込み、ときには○、×、？をつける。1作読み終えるごとに2位以内、そこに及ばず、1位候補の印を付けていく。もちろん後の読む作品の良し悪しにより、それが変わることもある。

ほかの二人もそれなりの方法で評価をし、最終会議に臨む。それぞれの評価を5段階評価にし、数字の合計点を出す。3人の評価に5はなかった。2がたまに入るが、3の評価が多い。最高点でも同点でも、文学賞や佳作に値するか論議する。こうして討議の末に選ばれたのが今回の受賞作だ。

小説部門の秋田文学賞受賞作『赦し』（常田あさこ）。独身のまま40代に入った美咲が上司のすすめる農家の青年誠と見合いをした。ほのかな好感が互いに芽生えてくる。そのようなすを描いた作品。これといつて破綻や大きな転換もないのだが、互いに40代まで独身できてしまったという控えめな気持ち、会話や心理描写にうまく表現されていて、読後感の良い良品に仕

上がっている。訓練された達者な文章で、対抗馬なしの決定だった。

佳作『近かったり遠かったりするもの』（青山トージ）は複雑な構成である。不倫の始末の場面から始まる。通信社デスクの日常と変化のない仕事場のこと、学生時代世話になった叔母の死、秋田に暮らす老いた母、コロナ騒ぎ。錯綜する出来事と日常の倦怠、時をさかのぼって思いを織り込みながら、短い枚数のなかで書き分けているが、今ひとつ意図が見えない。青山さんは随筆部門で文学賞受賞経験者だ。目の前の壁を破るには何が必要か。書ける人だけに何を表現するかを含めて問われているのかも。タイトルの意味は私には不明。

『ひとり祭り』達者な文で描写もうまいが、言葉が空滑りするところがある。『十七年目のババヘラアイス』は設定に工夫が必要。『八月の恩返し』『生きていれば、どうにかなること』『異界の人』。設定のおもしろさ奇抜さがあるが、描写や言葉にもう少し考慮を。

随筆・紀行文部門、文学賞受賞作は『蚕のなぐさめ』（春野昌和）。文句なしの1位だった。テレビのニュースから高校時代に飼った蚕のこと。趣味の登山のこと、山頂に祀られた石仏探し、同窓生の女性との思い出を82歳の私が振り返る。読んでしばらくたって心絵が浮かんでくるすばらしい作品だ。

佳作は『消えゆく集落の記』（鹿住敏子）。自然観察と描写がいい。言葉の選択に力を注ぐこと。作品に作者の思いが投影されるともつと心をうつ作品になるのでは。

『おもかげ』故郷や母への思いの深い作品。『台の洋館の宣教師』は資料調べや書く楽しさがよくわかる。この部門以外の作品へ仕上がったのでは。

全体に言えることなのだが、冗漫だったり、くどかったり、説明が多すぎたり、形容の言葉に無理があったりする。できあがってから、もう一度、削って仕上げる作業を加えた方がいい。出だしの10行ほどは、場合によってはとってしまった方がすっきり本題に入れる作品もある。舞台や背景の描写は多すぎると退屈を呼ぶ。削ぎ落としが心を打つこともある。さらなる研究を期待する。

〈作家 仙北市（旧角館町）出身〉



第7回ふるさと秋田文学賞について

西木 正明

秋田にも県民が気楽に応募出来る文学賞があったらいいという思いをこめて、小説と随筆・紀行文すなわちフィクションとノンフィクション2部門を対象とする、ユニークな文学賞が誕生して早7回目を迎えた。

そして今や、子供の頃から読書は好きなのに作文は苦手だった、筆者のような者をも元気づける、文学賞になりつつある。

こんなことを口走ると、

「直木賞作家のくせに、その言い方はないだろう。そういうのを、ひがみの裏返しというんだ」と、筆者の性格の悪さを指摘する悪友もいる。

しかしこれは、ひがみの裏返しではない。小中学校時代はさておき、ラブレターを書く年頃

になった高校生時代も、文章を書くのが苦手で代筆を頼んだ悪友たちに、手紙の最後の締め
に、

「今度会ったらキスぐらいしましょうね」

などと頼んでもいないことを書かれて振られてしまったことを、今でも覚えている。

そうした悲しい記憶を持つ者として、7回目を迎えたふるさと秋田文学賞の候補作を読んでいると、「すごい」と感じてしまう。

小説部門で晴れて受賞作となった常田あさこさんの「赦し」は、内館牧子、塩野米松、筆者の選考委員三人全員が早くから一致して、

「今回はこれでしょう」

と、授賞に賛成した。

今時めずらしくもない私小説風の作品で、ところどころでやりすぎの印象もあるが、それもこの作品の魅力になっている。

たとえば、

「予定日は二月八日ですな」

古ぼけた産婦人科で見せられたエコー写真の黒い粒。素人目には見落としてしまうほど小さな命。リスクを回避する方法は知っていたし、正しく行えているはずだった。しかし欲にまみれた人間が熱に浮かされた状態で行う行為ほど信用できないものはない。未成年二人には、一人の人間の命は重すぎた。

彼に背負わせたくなかった。彼の重荷になりたくなかった。彼の未来を守りたかった。彼に嫌われたくなかった。彼に捨てられたくなかった。彼に「諦めてくれ」と言われるのが怖かった。その一方で「産んでくれ」と言われるのも怖かった。彼と添い遂げる覚悟も、子を産み育てていく覚悟もなかった。

結局のところ私は自分がかわいくて、自分の都合で子を殺した。(後略)

恋に溺れる女の迫力を、迫力ある表現で描いた作品である。

同時に随筆・紀行文の部で受賞した、春野昌和さんの作品「蚕のなぐさめ」は、かつて秋田県の南部でも盛んに行われた、蚕と人間の関わりを克明に描いた力作である。

蚕はあの小さな体で、ポリポリと形容したらいいのかサワサワと言ったらいいのか、せわしなく小さな音をたてて見る間に桑の葉を小気味よく食べつくす。食べて食べて、やがて糸を吐いて自分の糸の城の中に入ってしまうのだ。

秋田県のあの時代を、蚕という今はほとんど見られなくなった小さな生物を通じて、読む者の涙を刺激する作品だ。

これらの受賞作はじめ、今回小説部門で佳作に輝いた青山トーゴさんの作品「近かったり遠かったりするもの」、同じく佳作を受賞した鹿住敏子さんの作品「消えゆく集落の記」など、ふるさと秋田文学賞は、われわれ秋田を故郷にする者にとって、おらほとこの夢を共有する窓口になっている。

〈作家 仙北市（旧西木村）出身〉

一次選考委員 寄稿

単色化

柴山芳隆

新沼謙治の唄う「津軽恋女」によれば津軽には七つの雪が降るといふ。「こな雪」「つぶ雪」「わた雪」「ざらめ雪」「みず雪」「かた雪」「春待つ氷雪」である。

この例に倣えば、日本の雨はすぐに二〇くらいを列挙できる。「大雨」「小雨」「春雨」「秋雨」「五月雨」「梅雨」「にわか雨」「夕立ち」「雷雨」「村雨」「霧雨」「氷雨」「時雨」「驟雨」「霖雨」「豪雨」「少雨」「細雨」「微雨」「白雨」「卯の花腐し」等々。「虎が雨」というのもあるが、これは旧暦の五月二八日に降る雨である。この日討ち死にした曾我十郎を悼んでその愛人・虎御前の流した悲涙が雨となったという伝説に基づいている。一年に一回しか使えない雨だが、今も俳句の季語としてちゃんと生きている。

雨を初め、湿気が多い日本ではその関係の言葉も豊富である。ヌレル・シメル・ウルオウ・

ソボツ・ホトビル・シトル……。擬態語の多いのは日本語の特色の一つだが、湿潤に関するものだけでもシットリ・シツポリ・ジメジメ・ジトジト・ビショビショ・グシヨグシヨ・ビチャビチャなど枚挙にいとまがない。日本の演歌に最も多く登場する単語は「泣く」と「涙」だと明らかにした研究者もいた。

そうした延長線上にあるのだろう、日本語には悲観的な心情を吐露する語彙が豊富である。カナシイ・アワレ・サビシイ・セツナイ・アジケナイ・悲哀・哀切・不幸・難渋……といった具合である。これと反対の、幸福な心理を表す語彙は貧弱で、すぐに思い浮かぶのは・シアワセ・幸福・幸甚程度である。晴を表現する単語が「晴天」「快晴」「日本晴」くらいなのに照応しているであろう。

日本人が雨を細かく言い分けるといふのは、わが国には幾種類もの雨の降り方がある事実を示すと同時に、自然に対する日本人の繊細さをよく表してもいる。四季折々の雨に、私どもはさまざまな感慨を抱くのである。

季節との関連で言うと、「春めく」「秋めく」など「くめく」という表現は外国語に翻訳不可能なそれとしてよく挙げられる。日本列島では順次春夏秋冬と変化していくが、その移り目

は微妙で曖昧である。昨日まで雨期で今日から突然乾期になる地域では「くめく」のような表現は絶対に生まれてこない。

外国語に翻訳不能の日本語は他にも数少なしとしない。ハシリ・シュン・タベゴロ・エダブリ・ユザメ・ハラゲイ……。このうち、「湯冷め」は日本人の風呂好きの反映であるし、「腹芸」は日本の長きにわたる外交音痴の原因を端的に物語っている。日本の交渉相手は、「はじめに言葉ありき」を出発点としている国々がずいぶん多いのである。

最近の天気予報では「夜の初め」という言い方をよく耳にする。日本は「夕べ」「宵」「夜」の順番で暗くなっていくのであるが、「夜の初め」が一般化することで「夕べ」と「宵」は廃語ないし死語化への道をたどり始めつつある。太陽が昇る時間帯の「あかつき」「あけぼの」「あさぼらけ」はより深刻な状況にある。

日本全体が単色化の傾向に向かいつつあると指摘されている昨今、言葉遣いにもそうした傾向が顕著に現れており、「ふるさと秋田文学賞」への応募作の多くもその範疇に含まれる。作者おのおのの多彩な個性が充分に発揮された作品を期待する所以である。

言語は、まずその意味内容がきちんと相手に伝わる事が重要であるが、それと同時に、人

間の感じ方や考え方といったものも正確に運んでくれるものでなければならぬ。人間は微妙で複雑な存在であるから、人間の発する言葉も繊細で機微に富んでいる。言葉遣いを単色化することで人間自体を単純化していかうとする試みや意図には常に注意を払っている必要がある。モノを読んだり書いたりを旨とする人にはそうした責任も付随していることを忘れないようにしたいものである。

〈作家 秋田市在住〉

秋田県の読書活動推進施策

～ 県民運動の視点で読書活動を推進～

秋田県では、全国に先駆けて読書条例（秋田県民の読書活動の推進に関する条例〈平成22年4月1日施行〉）を制定し、また毎年11月1日を「県民読書の日」と定めています。

平成28～令和2年度は「第2次秋田県読書活動推進基本計画」に基づき、「あなたの『読みたい!』をサポートします」「『読書は楽しい!』の気持ちを広げます」という県民運動の視点で、県民の共感を高めながら読書活動を推進しています。



©2015 秋田県んだッチH290213

《読書活動推進体制》

●秋田県読書活動推進基本計画の進行管理

秋田県読書活動推進本部《知事を本部長とし、各部局長で構成》

●施策の一体的推進

秋田県読書活動推進連絡会
《庁内関係12課所で構成》

総合政策課 次世代・女性活躍支援課
長寿社会課 障害福祉課
教育庁総務課 幼保推進課 義務教育課
高校教育課 特別支援教育課
生涯学習課 県立図書館
生涯学習センター

●市町村との協働による推進

秋田県読書活動推進連絡協議会
《県と25市町村で構成》

市町村企画担当課
市町村教育委員会読書活動推進担当課

県総合政策課
教育庁総務課 生涯学習課

≪令和2年度 県の読書活動推進の取組≫

○読んだッチ・リレー文庫

子どもたちの読書環境を充実させるため、読み終わった絵本や児童書を県民の皆様から寄贈していただき、保育所等に贈って子どもたちに読書の楽しさをリレーする取組です。

平成23～令和元年度までの9年間で1,044名の方々から寄贈があり、853か所の施設に届けられ、子どもたちに楽しんでもらっています。

保育所、幼稚園、放課後児童クラブ、公民館、体育館、病院、店舗等、子どもたちが集まる県内の施設ならどこでも設置できます。随時受付していますので、ぜひご利用ください。



読んだッチ・リレー文庫（例）

○「あきたブックネット」による情報発信

県公式ウェブサイト「美の国あきたネット」内の特設ページ「あきたブックネット」で、著名人がおすすめする本の紹介やこれまでの県の取組など、読書が身近になる情報を発信しています。

また、Twitterアカウント「あきたブックネット」では、読書に関して特徴ある活動をしている人物や巷で話題の本など、県内外の読書や秋田に関する新しい情報を随時提供していますので、ご覧ください。

あきたブックネット
@akita_dokusho

秋田県読書活動推進本部公式アカウントです。本のある暮らしをより身近に感じられるような県内外の話題を発信していきます。☆プロフィール画像は、秋田県PRキャラクター「んだッチ」です☆ 発信専用となりますので、お問い合わせは県総合政策課（Tel. 018-860-1216）へどうぞ。

◎ 秋田県秋田市山王4丁目1-1
🌐 pref.akita.lg.jp/pages/archive/...
📅 2018年1月からTwitterを利用しています

65 フォロワー 584 フォロワー

Twitter「あきたブックネット」

○読書の魅力発信事業

若者を中心とした県民の読書意欲を喚起するため、特徴のある取組をしている書店やブックカフェの経営者等取材しTwitterやウェブサイトで発信したり、県にゆかりのある著名人による本の紹介等読書啓発動画を制作し、動画投稿サイトYouTubeで配信しています。

～読書に関する情報を発信しています～

○「あきたブックネット」（「美の国あきたネット」内）

<https://www.pref.akita.lg.jp/pages/archive/31730>



作品募集要項・応募者内訳



第7回ふるさと秋田文学賞 作品募集要項

●募集作品

- テーマ 秋田県を舞台とした、あるいは秋田県内の自然・文化・風土・人物・物産などを題材とした小説、随筆、紀行文
- 部門 「小説の部」 ……A4判の400字詰め原稿用紙50枚以内
「随筆・紀行文の部」 ……A4判の400字詰め原稿用紙20枚以内

●応募資格

年齢・職業・国籍を問わず、どなたでも応募できます。

●作品募集期間

令和2年4月1日(水)から令和2年7月31日(金)まで
※郵送(当日消印有効)または持参(平日午前9時~午後5時)してください。

●賞

「小説の部」	ふるさと秋田文学賞 ……1編(正賞/賞状 副賞/賞金50万円)
	ふるさと秋田文学賞佳作…1編(正賞/賞状 副賞/賞金5万円)
「随筆・紀行文の部」	ふるさと秋田文学賞 ……1編(正賞/賞状 副賞/賞金30万円)
	ふるさと秋田文学賞佳作…1編(正賞/賞状 副賞/賞金3万円)

※入賞者には、後日、受賞作品集を贈呈します。

●選考委員

1次選考委員 柴山 芳隆 氏 (作家 秋田市在住)

最終選考委員 内館 牧子 氏 (脚本家 秋田市出身)
 塩野 米松 氏 (作家 仙北市:旧角館町出身)
 西木 正明 氏 (作家 仙北市:旧西木村出身) (五十音順)

●応募規定

- 原稿 ・原稿は縦書きとし、電子データでの応募は不可とします。(ワープロ原稿は横長A4判の白紙に30字×40行の縦書きで印字し、400字詰め原稿用紙換算枚数を明記)
・日本語で書かれた自作未発表のものとし、
- 表紙 ・応募作品には次の事項を明記した表紙をつけてください。
①応募部門、②題名(ふりがな)、③原稿用紙換算枚数、④氏名(ふりがな)、ペンネーム(使用する場合のみ)、⑤郵便番号、⑥住所、⑦電話番号、⑧年齢、⑨性別、⑩職業(学生の場合は学校名)、⑪引用または参考とした資料・文献、⑫募集を知ったきっかけ(過去に応募、リーフレット、公募ガイド、新聞、ウェブサイト名等)
- あらすじ ・200字程度にまとめた「あらすじ」を表紙の次のページに添付してください。
- 応募部数 ・作品は4部お送りください。(コピー原稿可。必ず通しページ番号をつけ、表紙、あらすじを書いた紙を添付の上、右肩をクリップ等で綴じること)。
- その他 ・表紙、ワープロ原稿の様式は、ウェブサイト「美の国あきたネット」でダウンロードすることができます。
・〈表紙〉に記入された個人情報、本文学賞に関するもの以外には使用しません。
・応募作品は一切返却しませんので、あらかじめご了承ください。
・各部門一人1編に限り、同一部門への二重投稿は失格となります。
・入賞作品の著作権は主催者に帰属します。(ただし、主催者は著作者本人の意向を尊重し、作品を広められるよう配慮するものとします)。

●選考結果の発表

- ・令和2年10月中旬、入賞者に直接通知するとともに、ウェブサイトに掲載します。
- ・表彰式は令和2年10月下旬に開催予定の「ふるさとの文学と読書のつどい2020」(秋田市で開催)で行います。

●応募・問合せ先

秋田県企画振興部 総合政策課 県民読書推進班
 〒010-8570 秋田県秋田市山王四丁目1番1号
 電話 018-860-1216 <平日:午前9時~午後5時>

ご注意
送付部数は
4部
(コピー可)
です。

第7回ふるさと秋田文学賞応募者内訳一覧(R2)

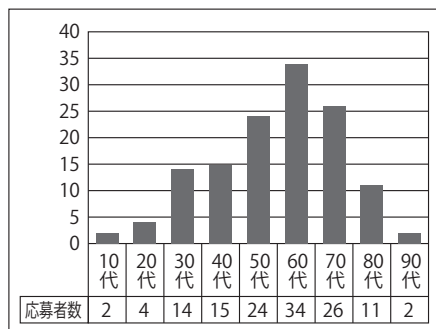
部門別応募数(編)

小説	77
随筆・紀行文	55
計	132

男女別応募者数(人)

男	82
女	50
計	132

年代別応募者数(人)



都道府県別応募数(編)

県内	応募数
北海道	2
青森県	1
岩手県	6
宮城県	3
山形県	0
福島県	0
茨城県	0
栃木県	1
群馬県	0
埼玉県	5
千葉県	7
東京都	18
神奈川県	13
新潟県	1
富山県	0
石川県	0
福井県	1
山梨県	1
長野県	1
岐阜県	4
静岡県	2
愛知県	1
三重県	0
滋賀県	1
京都府	1
大阪府	4
兵庫県	5
奈良県	0
和歌山県	0
鳥取県	0
島根県	0
岡山県	1
広島県	2
山口県	2
徳島県	0
香川県	1
愛媛県	1
高知県	0
福岡県	1
佐賀県	0
長崎県	0
熊本県	0
大分県	1
宮崎県	0
鹿児島県	0
沖縄県	0
計	132

第7回ふるさと秋田文学賞受賞作品集

発行日 令和三年二月十二日

発行 秋田県

編集 秋田県企画振興部総合政策課

秋田県